ISSN 0910-3090

國語問題協議會報
平成二十六年十一月一日發行

國語國字

第二〇二號

目次

第九十四回　講演會（平成二十六年五月十七日）
國語の名文と惡文　土田龍太郎　1
川端康成の日本語　富岡幸一郎　16

寄稿
一音節の大和言葉の世界　大喜多俊一　31
動詞の自他と複合　山崎　馨　36
國語議聯の六年　谷田貝常夫　38
新文體の創出　市川　浩　45
「起落過盡」の論理　高田　友　49
じる　高崎　一郎　52
正略百字表　石井公一郎　54
日中英　言葉の雜學（八）　高田　友　55
漢詩　故宇野精一先生輓讚　石川　忠久　59
後書　谷田貝常夫　60

題字・插畫　近藤祐康

これはよく例に擧げられるのではないかと思ふのですが、芭蕉に「荒海や佐渡に横たふ天の川」といふ名句があります。この「横たふ」といふ動詞がくせものなのですね。「横たはる」といふ自動詞はあるのですが、その「横たはる」が音便で「横たふ」に變はることはありえない。「横たふ」といふ場合は、下二段活用の他動詞です。ところが芭蕉の句では「横たふ」といふのが四段活用の自動詞になつてゐる。では、ここで芭蕉は語法を間違へてゐるのかといふことになるのですが、どうもさう簡單には言へないやうであります。芭蕉の時代には、自動詞の四段活用の「横たふ」が用ゐられることがあつたけれども、それは終止形連體形に限られる、といふことが小學館の國語辭典には記してあります。つまり、「佐渡に横たふ天の川」の「横たふ」といふのは、誤りに似て、しかも誤りとは言へない語形であります。外國語學習の場合でも、國語學習の場合でも、このやうに誤りに似てゐるけれども誤りでないといふ語法語形に出くはすことは珍しいことではありません。

高校では、あまり細かいことを教へるとかへつて生徒が迷惑するからまだ教へないでおくといふだけのことです。

また、私が「やんごとない」事情で、今日國際ビルに來ることができませんでした、といふとみなに笑はれることでせう。しかし、「やんごとない」といふ形容詞は本來「棄ててはおけない」といふ意味を持つてゐます。たとへば、親が急に入院するといふやうな棄ててはおけない事態が生じたから、國語問題協議會の講演會に出席できなかつたといふ場合、現代語では「よんどころない」といふ言葉を使ふことの方が多いのですけれども、「やんごとない」事情で來られませんでした、といふのは間違ひとは言へません。私の言ひたいことは、よほどの國語學識の持主でもない限り、人の文章や言葉使ひの正誤を論ふのは愼むべきだといふことです。

ことさら日本語愛を唱へるといふのも、私の感覺ではどこかをかしいのです。さういふ微妙な感覺は、皆様にはあるいは分かつていただけるかと思ひます。日本語といへば母國語です。つまり母親みたいなものです。母親を愛することは當然でまことに結構なのですが、人前で私は母親を愛してゐますなどと、ことさら必要もなしに言ふのは、まるで外國映畫の科白みたいで變なのです。逆に、フランス人やドイツ人やイギリス人がそれぞれの母國語を讃美する、母國語への愛情を吐露するといふことになると、なぜか非常に自然なのですね。

日本人が日本語愛を言ひ立てるとなぜ不自然なのか、ここに非常に微妙な問題があると思ひます。日本人が日本語を愛するといふことは全く正しい、といふより正しすぎる、あたりまへすぎるのです。あたりまへのことをことさら言ひ立てるといふのは、これは言擧げになつてしまひます。言擧げといふのは、日本では古來忌むべきこととされてきました。ただし、萬葉集の第十三巻で、柿本人麻呂が、「葦原の瑞穗の國はことあげせぬ國しかれどもことあげぞ我がする」と歌つてゐます。止むに止まれず、國語愛を言擧げせざるを得ないといふ場合はありうるでせう。國語問題協議會の會員であれば、さういふ事態に立たされることが多いのではないかと臆測致します。人前では、僕は日本語なんて興味ないよといふ顏をして、目立たぬ所で様々な國語の勉強に勵み、そして、さりげなく、非常によい國語文章を書いてみせる。それが理想のあり方ではないかと私はひそかに思つてをります。

さて、國語の名文とは何かといふのは、あまりにも大きい問題で、とても、私の今思つてゐることのすべてを御話するわけにはゆきませんので、本日はただいくつかの視點を提示するといふことにさせていただかうと存じます。

さきほど御話のあつた川端康成を含めて、いろいろな有名な作家が文章讀本といふものを著してをります。私はいくつか、さういふ文章讀本といふものを持つてをりますが、どうもそれらを讀んでもピンと來ない所があります。これらの作家は、優れた描寫力の發揮されてゐる文章をよい文章とみなしてゐるのではないかといふ氣がします。私は、もう少し具體的な、つまり語彙論とか語形論・構文論に及ぶやうな文章讀本があればと望みます。その點、谷崎潤一郎の「文章讀本」は、敍述が具體的になつてをりまして、私なんかにとつても、なかなか有益であるやうに思はれます。

さて、本日は「名文と惡文」といふ題名で御話しさせていただきます。惡文といふのは、要するに、深い考へもなしに、ぞんざいな言葉で好加減に書いた文章であり、それをいろいろ例を擧げて解説しても仕方ないと思ひます。私が中學高校生のときに、岩淵悦太郎といふ人の「惡文」といふ本が出ました。私は讀みませんでしたが、あの本は當時非常によく讀まれてゐたやうです。今回、あらかじめ大學圖書館から借りて讀んでみようかと思つたのですが、大學圖書館に置いてない。將來どこかで見つけたら、買つて讀んでみようかと思つてをります。惡文そのものについて考へるときは、岩淵悦太郎の本など讀めばよいのではないかと思ひます。

私の關心のあるのは、魅力ある惡文、惡文に見える名文

です。そのやうな文章を多少問題にしてみたいと思ひます。谷崎潤一郎が文章讀本の中で、「魅力ある惡文」といふことに言及してをります。例文(一)を御覧ください。

(一) 谷崎潤一郎　文章讀本

されば一見頭の惡い人間の書いた拙劣な文章に似てゐますが、それでもそれだけの用意があつて書く惡文には、惡文の魅力とでも云ふべきものがあつて、讀者を惹き着けるのであります。

まづここで慈圓の愚管抄といふのを採り上げたいと思ひます。慈圓の文體といふのは、全く獨特でありまして、初めて愚管抄を讀んだ人はたれも戸惑ひを覺えるのではないでせうか。彼の構文は必ずしも流暢でなく、途切れず長く續くことが非常に多い。したがつて、ところどころ文意が捉へにくくなつてをります。

例文(二)を御覧下さい。

(二) 愚管抄

コノ崇峻ノコロサレ給フヤウハ。時ノ大臣ヲコロサントヲボシケルヲキヽカサドリテ。ソノ大臣ノ國王ヲコロシマイラセタルニテアリケリ。ソレニスコシノトガモナクテツヽラトシテアルベシヤハ。中ニモ聖徳太子ヲハシマスヲリニテ。太子ハイカニサテハ御サタモナクテ。ヤガテ馬子トヒトツ心ニテヲハシマシケルゾト。世ニ心ヘヌコトニテアル也。サテソノ後カヽリケレバトテ。コレヲ例ト思フヲモムキモ。ツヤ〳〵トナシコノ事ヲフカク案ズルニ。タヾセンハ佛法ニテ王法ヲバマモランズルゾ。佛法ナクテハ。佛法ワタリヌルウヘニハ。王法ハエアルマジキゾト云コトハリヲアラハサンレウト。又モノヽ道リニハ一定輕重ノアルヲ。オモキニツキテカロキヲスツルゾト云コトハリト。コノ二ヲヒシトアラハサデ。道リノヲサルヽナリ。

これは、蘇我馬子の崇峻天皇の弑殺について慈圓が自分の考へを述べてゐるのですが、この文章をさつと讀んで、そして、すぐ文脈をきちんと捉へ、慈圓の言はんとするところを理解することができるといふ人がゐれば、その人はよほど優れた國語學識の持ち主であると言つてよいと思ひます。

この例文(二)の末尾「このふたつをひしとあらはさで、道理のをさるるなり」、ここは全く文意が通らない。これは岩波文庫本もしくは國史大系本からの引用であります。これらは文明本といふ最古の寫本に基づいてをります。岩波古典

文學大系本の方では、同じところが「この二つをひしとあらはかされたるにて侍るなり」となつてをり、意味がとほりやすくなつてをります。どうも古典文學大系本の讀みを取つた方がよいのではないかと思ひます。この古典文學大系の底本は松平家の島原本といふ戰後になつてから見つかつた愚管抄の寫本であります。ほんたうは慈圓の文體を論ずるに先立ち、本文批判のやうなことをせねばなりませんが、それは專門家に任せるほかはありません。細かい意味は省略致しますが、後ほど御自分で御讀みいただきたいと思ひます。

ここで、私の思ひ出のやうなことを語りますと、ちやうど大學紛爭の頃、昭和四十三年に初めて愚管抄を讀んでみたのですが、なあんだこの文章はまるで惡文ぢやないか、慈圓の歴史觀なんてまつたくこじつけぢやないかといふ氣が致しました。その頃は愚管抄なんて全然感心しなかつたのですね。ところが、歳月が經ちまして、四十近くになつて、また愚管抄を讀みたくなつて、讀み返してみますと、たしかに文章は讀みにくいところがある、ところどころ文意が通じない、しかし、その文章に何か一種獨特の味はひがある。慈圓の一見こじつけの歴史觀といふのも、單なるこじつけではなくて、もちろん、こじつけのところも中にはあると思ひますが、だけれども、全體としては、一種微妙な日本的知性の窺へる書ではないかといふふうに考へが變つてまゐりました。それからまた五六年經つて、三度目に愚管抄を讀んでみました。そのときになりますと、ますます愚管抄が好きになりまして、この愚管抄といふのは、惡文に見えるんだけれども、實は、非常に秀れた文章なのではないかと思ふやうになりました。一見こじつけのやうなんだけれども、ふつうの文章では言はうとして言ひえない、なかなか奥の深い考へ方といふものを慈圓がここで述べてゐるのではないかといふふうに見方が變はりました。結局どうも、愚管抄は私の愛讀書のやうになつてしまつたのです。

どういふ文章が名文かといふ議論は、廣い意味の文體論になつてしまひますが、文體論といふのは、その論者のそのときの學識教養の反映だといふことができます。つまり、歳月が經つにつれて、その人の文體觀は變つて行くのだと思ひます。私は西洋音樂といふのは全然疎いのですけれども、譬へに引きますと、小學生中學生が音樂に親しむやうになると、「白鳥の湖」など名曲だと思つて感激してしまふ。ところが、だんだん西洋音樂がほんたうに好きになると、「白鳥の湖」などでは物足りなくなる。もつと本格的なバッ

ハとかバロック音楽とかを愛好するやうになるのではないでせうか。文章についても、文體論についても、似たやうなことが言へると思ひます。若いときには非常によい文章だと思つてゐたものが、年取つてから讀んでみると、惡くはないんだけれども、それほどでもないといふ氣がしてくる。逆に、若いときはさつきの愚管抄のやうに全くの惡文ぢやないかと思つてゐたものが、年取つて讀んでみると、素晴らしい文だつたといふことが少しづつ判つて來る。名文惡文の問題は、氣長に考へて行かねばならないと思ひます。

先ほど慈圓の一種獨特な日本的知性と申しましたが、慈圓の微妙な考へには必ずしも言葉がうまくついてゆかない。だから、ところどころ、慈圓自身はもどかしさを感じながら文章を綴つていつたのではないかと思ひます。そこがまた慈圓の文體の一つの魅力ではないでせうか。こちらの學問が進むに隨つて、こちらの文體論が變はるのであります。

さて、魅力ある惡文の例として、私は長いこと大久保忠(ただ)教(たか)（彦左衛門）の「三河物語」を考へてゐました。初めてこれを私が讀んだときには、これは惡文ではないかといふ氣がしたのですが、今回、下調べのためにもう一度「三河物語」を眺めてみました。ところどころに、三河の方言とおぼしき奇妙な語法があります。また、全體に土の匂ひ、生活の臭ひがするやうな氣がしますが、そこが一種の味はひとなつてをります。大久保彦左衛門といふと、文筆に疎い一介の武弁(ぶべん)といふ先入觀がありますので、どうしてもかれの書いたものは惡文ではないのかと思ひ込んでしまひます。たしかに、ところどころ讀みにくい箇所はあるのですけれども、「三河物語」とは、魅力ある惡文といふよりは惡文に見える名文であると言ふべきでせう。

魅力ある惡文といふのはいはゆる地方文書(ぢかたもんじよ)などで、私はあまり讀んでゐないのですが、ふだん文筆とはあまり縁のないやうな百姓が書いた書翰などの中に、見受けられるのではないでせうか。

さて、國語の豊富な語彙が自由に驅使され、國語の孕む多種多様な可能性が自在に發揮されてをり、しかもそれから、なんらかの眞實がおのづから顯現してゐる、といふよりは、その文章そのものが、もう一つの眞實になつてゐる、それこそがまことの名文でありませう。ただ、今回そのやうな文の例を何か探さうかと思つたのですが、見つけ出すことはできませんでした。

例文㈢は幸田露伴の「寢耳鐵砲」といふ小説の一節です。

（三）幸田露伴　寢耳鐵砲

澁い手ばかりでは御意に入らじ、少し甘味も嘗めさせ呉れむとての此品(これ)か知らねど、此所の手に乘つて行かば又〻烈しく嘲才坊(てうさいばう)にさるゝか、但しはべつたりと濃く(しつこ)庄屋様欺しの待遇(もてなし)に逢ふは必定(ひつぢやう)、何方(どつち)にしても初會ぎり二度とは來ずと我を見透(みすか)して、意地になつて通はせる手と、惚(のろ)けさせて浮かれ寄らせる手と兩天秤に我を掛けし技量おもしろし、女め中〻味をやる、然し又求めずも縁あらば逢ふ時あるべし、此方(こち)から足を運んで向ふのおもふ壺に果敢なき夢見る章魚(たこ)となるはまあ〳〵虎様の爲(な)することでなしと、實はお萬を重く見過ぎたるよりの分別、重く見過ぎたるは畢竟(つまり)惚れたる慾目の沙汰なれど可笑(をかし)きは當人、少しも己が心の既戀(はや)に曇りたりとは氣づかずに居ける。

これは露伴が實に豊富な語彙語法を自在に驅使してゐることをよく示してゐる名文だと思ひます。つまり、言葉に使役されてゐない、言葉を存分に驅使してゐる、さういふ文體であります。言葉に使役されるといふのは重い衣裳をひきずつてよろめきながら舞臺を歩くやうなものですね。修辭過多の文と言つてよいかも知れません。露伴の場合は逆で、絢爛豪華な衣裳がすつかり身についてゐる。この寢耳鐵砲といふのは、年が明けてからたまたま讀んだ小説なのですが、藝者や花魁(おいらん)の世界を扱つた小説です。

幸田露伴と言へば、やはり「運命」のやうな史傳とか、「五重塔」などの名人氣質ものが本領だらうと思つてしまひます。いはゆる花柳界を扱つた小説といふと、どうしても尾崎紅葉の方が上だらうとつい考へてしまふのですけれども、この寢耳鐵砲といふ小説を讀むと、露伴がその種の世界について實に豊富な知識を持ち、それを實に巧みに鮮かに淀みなく表現し得た作家だつたことが分かります。やはり露伴といふ人が今まで思つてゐたよりも、さらに優れた文人だつたのだなあ、といふことを感じさせられた次第であります。

重い衣裳をひきずると申しましたが、修辭倒れの文も必ずしも惡いとは言へないでせう。まだ、文章修行の足りない若者がややもすれば、修辭倒れの文を書く。そこに、なんらかの眞摯なものが見て取れれば、それもやはり魅力ある惡文といふことにならうかと思ひます。

ここで源氏物語に話を移しますと、さきほどは、川端康成が湖月抄を讀んだといふ御話がありましたが、近代の作家で源氏物語を通讀したといふ人は必ずしも多くないと思

ひます。漱石や鷗外は、源氏物語惡文説をはつきり唱へたといふわけではないのですけれども、どうも源氏物語の文體は自分の性に合はないといふ趣旨のことを書きのこしてゐるやうであります。しかし、和文藝の最高峰は、何といつても源氏物語ではないでせうか。

例文(四)では、有名な須磨の巻の一節を擧げて置きました。

(四) 源氏物語　須磨

須磨にはいとゞ心づくしの秋風に、海は少し遠けれど、行平の中納言の、關吹き越ゆると言ひけむ浦浪、よる〳〵は、げにいと近う聞えて、またなくあはれなるものは、かゝる所の秋なりけり。

これは、まさに名文中の名文とみなされるもので、戰前の女學生は、この一節を暗記させられることもあつたといはれてゐます。これは名文だと思ひますが、源氏物語の中では分かりやすい、構文がとらへやすいところでありませう。

源氏物語などの和文藝作品にはそれぞれ特有の息遣ひのやうなものがあります。その息遣ひに慣れて行かなければなりません。和文といふのはもちろん、區切れと區切れの間が長く、その流れは、川の流れのやうで、ときどき旋回したり、また逆流したり、屈折に富むものでありまして、そのためところどころに淀みが生じてしまひがちであります。この淀みといふのは、文意を分かりにくくするものであり、そこから一種の破格構文のやうなものが生れることが稀ではありません。

例文(五)では若菜の巻の一節を掲げて置きましたが、これを現代語になほすといふことは今は省略します。

(五) 源氏物語　若菜一

としごろさもやあらむと思ひしことども、今はとのみもてはなれ給ひつつ、さらばかうにこそはとうちとけゆくすゑに、ありありて、かく世のききみみもなのめならぬことのいできぬるよ。思ひさだむべき世の有さまにもあらざりければ、今より後もうしろめたうぞおぼしなりぬる。

「としごろさもやあらむと思ひし」から、「今より後も」といふ所までは、紫の上の心の中の思ひを、今の言葉で言へば、直接話法で呈示してゐるのです。ところが、「としごろさもやあらむと思ひしこと……」は、直接話法で、紫の上の心の中を述べ、それが「今より後も」まで續くはずですが、その直接話法であつたはずの文が、いつのまにか、途切

れてゐる。直接話法を締めくくることなしに、地の文に繋げてしまふといふ一種の破格構文です。本居宣長は「玉の小櫛」の中で、破格だといふことに氣附いてをりまして、「今より後も」、ここまでが紫の上の心の中なんだから、その後に「と」といふ文字を補はなくてはいけない、といふ趣旨のことを述べてをります。この本居宣長の修正の提案が當つてゐるかどうかといふことですが、どうも、源氏學者、國語學者の間では、とつくに問題にされてゐるやうですね。

幕末の國學者に中島廣足（ひろたり）といふ人がをりまして、この中島廣足の本に「海人のくぐつ」といふものがあり、源氏物語の構文論なども取り上げてゐます。その中で中島廣足は、「うつり言葉」といふことを言つてゐます。廣足は、源氏物語では心のうちをいふ言葉が、いつのまにか、地の言葉に遷つてしまふといふことがときどき起こるので、「玉の小櫛に……、文字の落ちたるにやなどと言はれたるところもあるは、くはしく考へざりしゆゑなり」と言つて、はつきり本居宣長の修正の提案を必要ないと斥けてゐるのです。つまり、廣足は、一種の直接話法が締め括られることなしに、いつの間にか、直接話法でない地の文に移つてしまふといふ不思議な構文があるといふことにすでに氣附いてゐたわけです。現代の國語學者源氏學者は、この種のことはとつくに判つてをりまして、いろいろな論文が著されてゐるやうであります。

源氏物語といふのは、和文藝の最高峰なのですが、すでに述べましたやうに、ところどころで文が淀むことがあります。文の淀みといふのは、ところどころに破格的な構文を生み出しますが、その破格に見える構文を破格だから駄目だといつて斥けてはいけない。そこにむしろ和文藝の一つの妙所があると考へるべきだといふのです。

源氏物語では、また、ところどころで、好んで但し書きのやうな語句が用ゐられてゐます。ここに、また一つの味ひがあると思ひます。有名な書き出し、「いづれのおほんときにか女御更衣あまたさぶらひたまひける中に、いとやんごとなききはにはあらぬがすぐれてときめきたまふありけり」といふ文の「いとやんごとなききはにはあらぬが」は、大變身分が高いといふわけではないけれども、といふ但し書きなのですが、これこれといふほどではないんだけれどもといふ但し書きが、なかなかよい效果をもたらしてゐるのではないかと思ふのです。源氏物語では、さういふ但し書きが非常に多いのです。そこが漢文と全く逆なのです。漢文は誇張すればするほど效果がある。和文の場合、あん

まり誇張すると效果がなくなる。「といふほどではないが、やはりめでたいのだ」さういふ句法が和文的で、そこにまた和文のよさがあると私は考へます。

また、和文の場合はあまり對句を用ゐない方がよいと思はれますが、ここもまた漢文と逆ですね。漢文といふのは、必ず對句を用ゐるといふことになつてゐる。もつとも和文の場合、對句がまつたく駄目だといふわけではない。對句にしておいて、左右の對照をちよつと崩すといふのがなかなか效果的なのですね。白樂天の詩に

不堪紅葉青苔地　亦是涼風暮雨天

といふ詩句があります。これは、和漢朗詠集に載つてをりますが、「紅葉狩」といふ謠曲の中でこれが引かれてをりまして、そこでは「堪へず紅葉青苔の地、またこれ涼風暮れ行く空に雨うち濺ぐ夜嵐の」と續いてをりまして、對句を採り上げてゐるんだけれども、少しばかり左右の對照を崩してをります。このやうなところに、一種の和文獨特の魅力が發揮されてゐるのではないかと思はれます。

また、各句の主語が明示されてゐないこと、これが文章を難しくしてゐる、これは確かでせう。

また、紫式部の文章の特長の一つは、ある語が、例へば修飾語的形容詞がすぐ下の名詞を修飾するのでなくて、何語か隔てた後の語にかかるといふことです。そのため、構文把握は非常に難しくなります。

ほかに御話すべきことはいくらもありますが、源氏物語の文體論は、私自身の今後の課題といふことにいたしたいと思ひます。

さて、偽らず飾らず、物事をありのままに述べる文章、誰にでも判る平易な文章こそが、よい文章だといふ非常に單純な文章論が今の日本では優勢ではないかと思はれます。かなり偉い學者の中にも、このやうな單純な文章觀を信奉してゐる人が少なくないやうです。

日常生活ではたしかに、なるべく多くの人に分かる文章を、平易でしかも正確な文章を書かなければいけないといふ場合がいくらでもあるでせう。大地震の場合は、これこれに氣をつけて、これこれを携へて、どこそこに避難して下さい。あるいは、JRのどこそこで人身事故が起きました。したがひまして、中央線は何時から何時まで不通になります、といふ文章は、平易で正確でなければならない。

さういふ平易かつ正確な文を作らねばならぬ場合は、日常生活にはいくらもありますけれども、私の本日の御話では、日常生活の文章よりは、文人の文といふことをまづ第一に考へたいと思ひます。

難解だから惡い文章だと言つてはいけません。平易かつ正確な文でなければいけないといふ場合は、客體としての事物、確乎たる客觀的な事態を想定しうる場合に限られます。個別的、具體的な、小さな眞實を述べる場合は、いはゆる一種の客觀主義に立脚しなければいけない。ここに白い紙がある。紙は白い、とありのままに言へばよい。さういふ場合は寫實主義でかまはない。

ところが、文人の文、本當の名文といふことを考へる場合は、さういふ客觀主義では立ち行かないと思ふのです。特に人間にとつて非常に大切なのは、人間と人間との關係ですね。人間と人間との關係といふのは、必ずしも客觀的事態として捉へることができません。主觀をも客觀をも包攝するところの、日常の客觀世界とはまた違ふ高次の世界といふものを考へなければいけません。さういふ高次の世界といふことになりますと、ふつうの客觀主義・寫實主義ではとても間に合はないのです。

私などは現役時代には廣い意味での考證のやうなことをだいぶやつて來ましたが、考證とは客觀的な事態を前提として行ふものです。例へば、ここに繩文式土器があるといふ場合は、學者がやらなければいけないのはまづ計測、高さ何センチ、横何センチ、差し渡し何センチ、厚さ何ミリ、材質は何か、といふことについての正確な計測と觀察、そして的確な記述、描寫であります。それに立脚した上で、はじめて理論を進めて行くといふことができます。繩文式土器の研究などは、一種の客觀主義に立脚しなければならなくなりますので、したがつて、平易かつ正確な論文を書くといふことがむしろ望ましいのです。そこに、學者の文章はうますぎてはいけないといふ考へ方が生れて來る素地があります。いろいろな學者がゐて、いろいろな學問があり、いろいろな分野がありますから、一概には言へないけれども、いはゆる人文科學では、多くの場合、客觀世界を自明のこととして想定せざるを得ません。學者はあまり名文を書く必要はないといふ考へ方に一理はあると言つてよいでせう。

ところが具體的個別的眞實でない、もつと高次の眞實を文章でうまく捉へようといふ場合には、客觀主義ではとても間に合ひません。とりわけ大切なものは、人と人との關係であります。生きた人間が相手である場合、相手は確乎たる客觀として捉へうるものではありません。

したがつて、相手の前でわざと怒つてみせる、すねてみせる、逆に御世辭を言つて相手の歡心を買つてみるとかいふやうなことをします。西洋語でいふところの、いはゆる

コケトリイも時には必要になるでせう。さうすると相手はそのつど、少しづつ異る反應を示す。異る反應を示すうちに、そのうち相手はふと自分の本性や本心を顯します。そこで初めてこちらは素早く相手の本性や本心を把握することができます。このやうな思索は文章論にも取り込むことができるのではないでせうか。言ひ換へれば、日常の作文ではない、優れた文人の文といふものは、なんらかの演技を伴ふものではないのかと私は考へるわけです。

ここでどうしても思ひ起されるのは、福田恆存先生の名著「人間・この劇的なるもの」であります。生活とは演技なのであると言ふと、下手をすれば誤解され、その發言を惡用されます。生活とは演技であるとか、文章とは演技であるとか、あまり言はない方がいいやうな氣もするのですが、國語問題協議會の會員の方なら解つていただけるのではないかと思つて御話する次第なのです。

福田先生の名著は、例文(六)に掲げておきました。

(六)福田恆存　人間・この劇的なるもの

自然のままに生きるといふ。だが、これほど誤解されたことばもない。もともと人間は自然のままに生きることを欲してゐないし、それに堪へられもしないのである。程度の差こそあれ、だれでもが、なにかの役割を演じたがつてゐる。また演じてもゐる。ただそれを意識してゐないだけだ。さういへば、多くの人は反撥を感じるであらう。芝居がかつた行爲にたいする反感、さういふ感情はたしかに存在する。ひとびとはそこに虚僞を見る。だが、理由はかんたんだ。一口にいへば、芝居がへたなのである。

福田先生の場合は、俳優だけが演技してゐるのではない、我々一人一人が日常生活の中で、何らかの演技をしてゐるはずなのだといふのが思索の出發點になつてをります。「人間・この劇的なるもの」は含蓄の深い書物でありまして、私もまだ十分には消化できてゐないのですが、結局、後半では、個と全體の關係、必然と偶然の關係といふことに議論が及んでをりますが、文章論には福田先生の思索はあまり及んではをりません。生活とは演技なのであるといふ考へ方から私も出發します。それなら、文章だつて演技なのではなからうかといふふうに自然に考へが及んでしまふのです。

名文と呼びうる文章には、何らかの演技的な精神があるのではないかといふのが私が日頃考へていることであります。さて、さきほど、相手の前でわざとすねてみせるとか

怒つてみせるとか申しましたが、その相手が自分自身であるといふこともありうるわけです。自分自身と樣々に關りあふうちに、下手をすると、惡しき自己愛、ナルシシズムに陥る危さはあるでせう。しかし、そもそも、文人とはつねに危きに遊ぶものではないでせうか。自己を客體として捉へるといふのは本來無理なことなのです。さうすると、自己といふえたいの知れない相手とうまく關り、ふと、よいきつかけを見つけて、なんらかの認識に至るしかないのではないか、そのあたりは、私の考へもまだまとまつてをりませんので、はつきりとしたことは御話できないのであります。

さて、演技と不可缺に關るものは化粧といふことであります。上手な化粧といふのは、その婦人に内在する美とか魅力を、外的なもの、つまり衣裳や化粧品の助けを借りて顯現させるといふことです。本當は黒い髮なんだけど、茶色に染めてしまふとか、脣を實際よりも赤く見せる。膚を實際より白く見せる。本當は皺があるのだけれど、化粧品の助けを借りてそれを隱す。つまり、化粧といふのは嘘であり僞りであるわけです。しかし、その婦人に内在する魅力とか、潛在する美とかいふのは一つの眞實であると私は捉へます。さうすると、化粧といふのは、僞りと嘘によつて眞を抽き出すといふ營みなのだといふことができるやうに思はれてきます。もつとも、これはあくまで上手な化粧について言ふわけでありまして、下手な厚化粧は論外です。

このやうに、生活演技論から文章演技論へと話を持つてきましたが、文章が演技ならば、文章にも當然化粧があるだらうと考へられます。個別的具體的小眞實ではない、もつと高次の眞實、人間と世界の兩方を包括するやうな何物か、これをなんとか文章で表現しようといふやうな場合には、なんらかの虚構の助けを借りなければいけないのではないか。なんらかの虚構を通してはじめて、眞實が顯現するのではないかと考へます。

その虚構にはいろいろある、演技とか、化粧とかがそれと言つてよいと思ひます。

文章において、化粧に相當するものが修辭であります。我々の世代が受けてきた教育では、修辭といふのは餘計なもの、よくないものだといふ考へ方がかなり一般的でした。もつとも、私の若い頃は、西洋では小學校のときから、きちんとした作文教育をやつてゐるんだ、だから、西洋の大學生は立派な文章が書けるんだ、それに引き換へ、日本の作文教育は全然なつてゐない、といろいろな人が雜誌に書いてゐました。私もそのつもりでゐたんですが、ところが、

外國に行つてみますと、もちろん優秀な學生はゐますが、いはゆる一般學生などを見てみてゐますと、案外、文體意識は薄いのですね。日本では日教組教育といふ言葉がありますが、どうも西洋でも、廣い意味での日教組教育のやうなものがあつて、日本ほどではないけれども、ある程度の影響力を教育界に及ぼしてゐるのでないかといふ氣がします。

ともあれ、私は修辭といふのはやはり本來大切なものだと思ひます。よい文章を書かうといふ場合に修辭は不可缺のものと考へます。

ところが、その修辭といふのは、何も文章家だけがやるものではない。そこらへんのぞんざいな言葉使ひをする若者もいくらでも修辭をやつてをります。例へば、反語といふのは修辭であります。反語のことを英語ではrhetorical question と言ひますが、反語とはレトリックだといふことは反語とは修辭だといふことです。若者が、「そんなことあつてたまるか」などと言つた場合、これは反語ですから、修辭の一種です。本當は疑つてゐないことを疑つてみせるのが反語なのですから、反語とは一種の演技でもあります。ですから、演技とか修辭とかいふのは、文人の文章だけでなく、實は言語そのものに内在してゐるものではないかといふ考へもここで浮んできます。

いづれにしても、名文を著さうと志す者は、修辭學といふものに正面から取組まなくてはいけません。しかし、修辭學體系構築が目的なのでありません。自分がなるべくよい文章を書くために、古今東西の修辭學を參考にすべしといふことなのです。實用的な修辭學を考へればそれでよいのではないかと思ひます。では、さしあたりどういふ本を讀んだらよいかといふことになりますが、私も模索してゐる所であります。

さて、さきほど申しましたやうに、たれにでも分かるやうな易しい文章がよい文章なのだといふ、さういふ幼稚な考へはよくない。一方、書き手の論理とか情感が讀者にひしひしと迫つて來る、讀者の心を捉へてやまないといふ文章がありえます。これは一種の名文と言つてよいでせう。

しかし、これが最高の名文かといふとさうとは言へない。その上の境地があると私は思ふのです。

すなはち、書き手の論理とか情感をも越えたもの。その書き手すら初めは氣附かなかつた、思つてもゐなかつたやうな、こよなく深遠な、または崇高な眞實のやうなものが、その書き手の文からひとりでにふと浮びあがつて來るといふ、さういふ不思議な文章、さういふ文章こそが、最高の名文であると私は思ひます。では、なにかよい例文があるかと言はれますと、今回はちよつと間に合はず、見附け出すことはできませんでした。私自身がさういふ稀有の經驗をしたとは決して申しませんが、さういふ不思議な境地は必ずある、これが私の第一の信念であります。さらに、古來の優れた文人とか歌人はどこかで必ずさういふ靈妙な經驗をしてゐるはずだ、これが私の第二の信念であります。これはやはり、言葉に宿る魂のくすしきさきはひではないかと思ひます。さういふ言葉の魂がときどき本當の名文を生み出すのではなからうかと思ひます。

本日は、私自身にも、考へがまとまらない部分がありますので、必ずしも、歯切れよく御話できませんでした。あるいは、そんなこと疾（とう）くに分かつてゐるよとか、私の話があまりにも初歩的だつたといふ御不滿もあらうかとは存じますが、なにとぞ御宥恕いただきたいと思ひます。

（つちだ　りゆうたらう　東京大學名譽教授）

川端康成の日本語

富岡幸一郎

富岡幸一郎でございます。よろしくお願ひします。

谷田貝先生から國語の教科書問題のお話がありましたが，私は今「新しい歴史の教科書を作る會」の理事をさせていただいてをります。

今日は「川端康成の日本語」といふことで話をさせていただきたいと思つてをりますが、私自身は國語學とか國文學の専門家ではございません。ただ、二十代から文藝評論を書いてをり、主に日本の近代小説、戦後の小説等、文學について色〻評論を書いてまゐりました。

私がこれまで一番多く書いてきた作家は、三島由紀夫です。三島由紀夫の文學に、大變長く親しんできました，不十分でありますが，自分なりに三島の文學と思想に觸れ，三島が訴へた憲法改正の問題，戦後の日本のさまざまな問題等に關心を持ちまして，文學と共にさういふ問題に關はりを持つてまゐりました。

私事で恐縮ですが、昨日、川端康成について書いたものが發賣されました。さういふこともあり、川端の小説について少し話をさせていただきたいと思つてをります。

川端康成は生れは大阪ですが、昭和十年ごろから鎌倉に長くお住ひでした。昭和四十七年に亡くなるまで鎌倉でずつと仕事をされてゐました。

私が今館長をしてをります鎌倉文學館は長谷にありまして、大變素晴らしい西洋式の別荘を文學館として使つてをりますが、その文學館のすぐ近くに、川端宅がございます。

川端は、初期の頃は御存じかと思ひますが、新感覺派と呼ばれた、非常にアヴァンギャルド、モダニズムの作家です。川端の盟友でありました横光利一、戦後すぐに亡くなりますが、横光や川端たちがさういふ新しい日本語のスタイル、――これはどちらかといふと飛躍の多い日本語です――さういふスタイルで書いてゐたわけです。

しかしその後、川端はそのやうな新感覺派の作品を書きながら、「淺草紅團」――これは昭和四年ごろに書いた淺草を舞臺にした作品ですけれども――これも非常に新感覺派的な飛躍が多いのですが、その後彼はだんだんと變つていきます。そして、あの「雪國」といふ作品を昭和十年から書き始めるわけです。

つまり川端康成といふ作家はある固有の文體を持つてゐ

たと言ふよりは、作家として生きつづける生涯の中で、作品を書きつづけながら、彼の日本語が新たになつていつたといふ気がします。

今日は長〻とコピーを作つてきましたが、例へば「伊豆の踊子」といふ、有名な作品がございます。これは川端の中でも代表作として有名ですが、いはゆる初期の新感覺派といふものとは違つた大變滑らかな文體で書かれてをります。

ちよつと一枚目の一文を御覧いただきたいのですが、「伊豆の踊子」は御存じかと思ひますが、川端が一高生になり伊豆の方に旅行した時にたまたま行き會つた旅藝人の一行のことを材料にして描いた作品です。

川端は生後すぐにお父さんを亡くし、二歳でお母さんを亡くし、そして祖父母に引き取られ、その後引き取つてゐたおばあさんを亡くし、十五歳の時に祖父も亡くします。そして天涯孤獨の孤兒になるわけですけれども、さういつた自分の小さいころからの孤獨を抱へる一高生が旅藝人と一緒になつた時、そこにゐた一人の若い藝者の娘との觸れ合ひの中で自分の心が和らいでいく、さういつた作品であります。ただこれは實際の川端の伊豆での體驗ではなく、それを材料にしてゐるので、實際は一高生といふと大變なエリートでありますし、旅藝人は言はれてゐるやうな非常に卑しい身分、體を賣るやうなさういつた身分の者です。ですから實際はこのやうなストーリーはなかつたと思ひますが、川端は一つの文章の中で大變美しい物語に仕上げた。

ちやうどこの一枚目の眞ん中あたりですけれども、「夕暮れからひどい雨になつた」といふところからです。これは實は一緒になつた旅藝人の若い娘が夜お座敷に出る。そして主人公の私は向かひの宿に泊まる。ですから旅藝人がいかなるものであるか、その娘の踊り子たちがどういふものであるかはもちろんこの一高生は知つてゐるわけですけれども、さういつた思ひが描かれてゐるシーンです。

ちよつと拙い朗讀ですが讀ませていただきます。

> 夕暮れからひどい雨になつた。山〻の姿が遠近を失つて白く染まり、前の小川が見る見る黄色く濁つて音を高めた。こんな雨では踊子達が流して來ることもあるまいと思ひながら、私はじつと坐つてゐられないので二度も三度も湯にはひつてみたりしてゐた。部屋は薄暗かつた。隣室との間の襖を四角く切り抜いたところに鴨居から電燈が下つてゐて、一つの明りが二室兼用になつてゐるのだつた。
>
> ととんとんとん、激しい雨の音の遠くに太鼓の響きが

微かに生れた。私は掻き破るやうに雨戸を明けて體を乘り出した。太鼓の音が近づいて來るやうだ。雨風が私の頭を叩いた。私は眼を閉ぢて耳を澄まし乍ら、太鼓がどこをどう歩いてここへ來るかを知らうとした。間もなく三味線の音が聞えた。女の長い叫び聲が聞えた。賑かな笑ひ聲が聞えた。そして藝人達は木賃宿と向ひ合つた料理屋のお座敷に呼ばれてゐるのだと分つた。二三人の女の聲と三四人の男の聲とが聞き分けられた。そこがすめばこちらへ流して來るのだらうと待つてゐた。しかしその酒宴は陽氣を越えて馬鹿騷ぎになつて行くらしい。女の金切聲が時々稻妻のやうに闇夜に鋭く通つた。私は神經を尖らせて、いつまでも戸を明けたままじつと坐つてゐた。太鼓の音が聞える度に胸がほうと明るんだ。

「ああ、踊子はまだ宴席に坐つてゐたのだ。坐つて太鼓を打つてゐるのだ。」

太鼓が止むとたまらなかつた。雨の底に私は沈み込んでしまつた。

やがて、皆が追つかけつこをしてゐるのか、踊り廻つてゐるのか、亂れた足音が暫く續いた。そして、ぴたと靜まり返つてしまつた。私は目を光らせた。この靜けさが何であるかを闇を通して見ようとした。踊子の今夜が汚れるのであらうかと悩ましかつた。

雨戸を閉ぢて床にはいつても胸が苦しかつた。また湯にはいつた。湯を荒々しく掻き廻した。雨が上つて、月が出た。雨に洗はれた秋の夜が冴え冴えと明るんだ。跣で湯殿を拔け出して行つたつて、どうとも出來ないのだと思つた。二時を過ぎてゐた。

これがその夜のシーンで、續いて朝のシーンです。

翌る朝の九時過ぎに、もう男が私の宿に訪ねて來た。起きたばかりの私は彼を誘つて湯に行つた。美しく晴れ渡つた南伊豆の小春日和で、水かさの增した小川が湯殿の下に暖かく日を受けてゐた。自分にも昨夜の悩ましさが夢のやうに感じられるのだつたが、私は男に言つてみた。

「昨夜は大部遲くまで賑かでしたね。」

「なあに。聞えましたか。」

「聞えましたとも。」

「この土地の人なんですよ。土地の人は馬鹿騷ぎをするばかりで、どうも面白くありません。」

彼が餘りに何げない風なので、私は默つてしまつた。

「向うのお湯にあいつらが來てゐます。――ほれ、こちらを見つけたと見えて笑つてゐやがる。」

彼に指ざされて、私は川向うの共同湯の方を見た。湯氣の中に七八人の裸體がぼんやり浮んでゐた。

仄暗い湯殿の奥から、突然裸の女が走り出して來たかと思ふと、脱衣場の突鼻に川岸へ飛び下りさうな恰好で立ち、兩手を一ぱいに伸して何か叫んでゐる。手拭もない眞裸だ。それが踊子だつた。若桐のやうに足のよく伸びた白い裸身を眺めて、私は心に淸水を感じ、ほうつと深い息を吐いてから、ことこと笑つた。子供なんだ。私達を見つけた喜びで眞裸のまま日の光の中に飛び出し、爪先きで背一ぱいに伸び上る程に子供なんだ。私は朗らかな喜びでことこと笑ひ續けた。頭が拭はれたやうに澄んで來た。微笑がいつまでもとまらなかつた。

踊子の髪が豊か過ぎるので、十七八に見えてゐたのだ。その上娘盛りのやうに裝はせてあるので、私はとんでもない思ひ違ひをしてゐたのだ。

これは「伊豆の踊子」の一つの場面ですけれども、今讀み出しましたこの一場面が本當に滑るやうな滑らかな言葉で書かれてをります。いはゆる淀みがありません。そして短い言葉が重ねられてゐます。

「淺草紅團」などはむしろちよつと奇矯な、飛び上がるやうな、あるいはコンビネーションを羅列するやうな、さういふ文體で淺草といふ場所を描いてゐるのですけれども、この「伊豆の踊子」の小說の文章は本當に滑るやうですから、さほど長くない作品で、中編と言つていいかと思ひますが、讀んでいきますと讀者は最後踊り子と別れて船に乘つて歸る私のシーンまで一擧に讀ませられる。さういつた文章で貫かれてゐます。

もちろん川端の出世作でありますけれども、彼の中の心の、非常に小さいころから苦勞し、また天涯孤獨の思ひを持つてゐた、この孤獨の心がゆつくりと溶けていくやうな、和らいでいくやうな、いはば命といふものを一人の踊子の裸身、幼い裸の輝きの中に見出す。そしてこの主人公はこの踊り子の娘に淡い戀心を、そしてまた踊り子の方もこの一高生の私におそらく淡い戀心のやうな思ひを抱いてゐる。

さういふ風にこの作品は書かれてゐますけれども、この二人がそれ以上深い男女の仲になることはもちろんありません。正(まさ)に近づいてそして靜かに離れていく、その近づいた瞬間にある心の交流が起こる、その交流を非常に滑らかな短い文體で描いてゐます。この作品が川端の代表作の一

つとして今日も讀み繼がれてゐる。新感覺派から新たな文章を創りだしてきた川端が新しい段階に入つてきた作品ではないかと思ひます。

　この作品は何回も映畫化されてゐます。三島由紀夫の「潮騷」、川端康成の「伊豆の踊子」は、さういふ意味では近代小説の推奬文學の代表的な作品であると思ひます。

　そして先ほど申し上げましたやうに、昭和十年から川端の代表作となる「雪國」を書き始めます。

　次のところになりますが、ちよつと一部冒頭のところを何枚かコピーしてきましたが、雪國は、實際に越後湯澤の温泉地ですね。私はまだ行つたことはないのですが、川端が逗留した温泉宿がモデルになつてをり、そこにゐた藝者、作中では駒子となつてゐます。

　昭和九年の六月に水上から信越トンネルが開通しまして、この越後湯澤の地に行けるやうになりました。それまではなかなか遠い山越えをしなければならないので、水上温泉には川端はしばしば原稿を書きに行つてゐたやうですが、この越後湯澤まではトンネルが開通したことによつてその地に赴いたわけです。

　そして昭和十年から十二年にかけて連載する。川端の書き方と言ふのは、いつぺんに長編を書くのではなく、各雜誌に連作といふか、ある一部分を載せる、もう一部分をまたある雜誌に載せる。短編のやうに書いていつたものがまとまると一つの中編、長編小説になる。これは日本獨特の文藝雜誌に毎月書いていく、斷續的に發表していくといふ、さういふ形になつてゐます。

　ですから讀者としては、それぞれの章のタイトルが付いてゐますが、短編だと思つて讀んでいく。讀者が川端康成の短編小説の作品だと思つてゐると、ただそれが何年かすると一つの形になつていつて、一つの作品としてまとまつて全貌を現す。

　ですから初版本の雪國は昭和十二年の六月に單行本になつてゐるので、川端の「雪國」といふと、この昭和十二年版が一つあります。しかし彼は、單行本になつた後も書き足してをり、さらに戰爭が終つた後に更に、一番最後の場面を書き加へてをります。ですから昭和二十三年の十二月に創元社といふ出版社から「雪國　決定版」が出るわけです。非常に長い時間をかけて「雪國」を書いてをります。九年近い時間をかけてゐます。しかも戰爭による中斷、戰後の混亂の中で更に書き足してゐます。

太宰治といふ作家がをります。鎌倉文學館で太宰治展をやつてをりますが、太宰は川端を非常に尊敬しながらも恨んでをりました。といふのは、太宰の「晩年」といふ小説作品が芥川賞にノミネートされたとき、選考委員に川端がをりまして、太宰は熱烈に川端に、ぜひ私に芥川賞を下さいと、大變太宰らしい手紙をしたためてをります。この手紙はまだ殘つてをりますが、巻紙で、筆書きで「この作品で芥川賞を下されば私は生きていけます」といふ懇願ですね。

　それに對して選考委員の川端康成は、「この作家は生活に暗い雲がかかつてゐる」と評して、芥川賞授與に反對したと言はれてゐます。現實にどうだつたかは分かりませんが、それに對して太宰は大變な恨みを抱いて、川端のことを惡く言つてをりますが、「雪國」に關しては「これは參つた」と言つてをります。これは、「虚假（こけ）の一念で書いたすごい作品である、私は參つた」と正直に太宰は告白してをります。それほど「雪國」は川端が徹底的に推敲して描きだした作品であります。雜誌初筆も大幅に變はつてをります。今日コピーしてきた一枚目を御覧いただきたいのですが、有名な書き出しです。

國境の長いトンネルを拔けると雪國であつた。夜の底が白くなつた。信號所に汽車が止まつた。

　これは有名な書き出しです。この「國境」を「こくきやう」と讀むか「くにざかひ」と讀むかでちよつと議論がございます。「こくきやう」だとロシアに行つてしまふといふこともあるのですが、「くにざかひ」と讀むとちよつと音が惡い。川端が割に音を大事にしたので、やはり「こくきやう」と呼んで良いだらう。

　「國境の長いトンネルを拔けると雪國であつた。夜の底が白くなつた。信號所に汽車が止まつた」

　この二聯目の「夜の底が白くなつた」これはそのトンネルを拔けて夜になつて、そこに雪の白い世界がぼおつと浮かびあがる。

　普通でしたら薄暗い中に降り積つた雪が白く輝いてゐる、或いはほのかな明かりの中に地面に積つた雪の白さが浮かび上がるとか、書くところでありますが、「夜の底が白くなつた」といふ、これはいはば新感覺的な表現です。大變良い表現だと私は思ひます。

　實は初筆はかうではなく、初筆はちよつと先にありますが、次の右上に四と書いてある、一番後ろのところ、「島村

は彼女の」その後の最後の後ろから二行目になります。

もう三時間も前のこと、島村は退屈まぎれに左手の人差指をいろいろに動かして眺めては、結局この指だけが、これから會ひに行く女をなまなましく覺えてゐる、はつきり思ひ出さうとあせればあせるほど、つかみどころなくぼやけてゆく記憶の頼りなさのうちに、この指だけは女の觸感で今も濡れてゐて、自分を遠くの女へ引き寄せるかのやうだと、不思議に思ひながら、鼻につけて匂ひを嗅いでみたりしてゐたが、ふとその指で窓ガラスに線を引くと、そこに女の片眼がはつきりと浮き出たのだつた。

このところが初筆では出てきます。この女が藝者の駒子でありまして、これから駒子に會ひに行く。「左手の人差し指だけがこれから會ひに行く女をなまなましく覺えてゐる」これが、冒頭に來てをります。

ただし、昭和九年は檢閲がありましたから、この「人差し指」は檢閲でカットされました。こんな風にこの作品は初筆、檢閲は別にしても、川端は單行本にする際に入れ替へてゐます。細かく表現を入れ替へてこの雪國に入つていく、つまり、駒子といふ女がゐる雪國は一つの別世界である。

現實の世界はトンネルのこちら側、トンネルを越えて雪國の白の世界に入つていくとそこは別の世界。いはば現實と幻、現と夢の境がこのトンネルであり、そこを通つて行くとその別世界に入つていく。そのやうな設定を明確にするために初筆を變へ、ある意味ではインパクトのある人差し指が覺えてゐるといふ最初のものから、トンネルを抜けると雪國だつたといふ風に入れ替へてゐます。

このやうに雪國は川端が長い時間をかけて一つ一つ言葉を選んでいつた作品です。

少し讀みたいと思ひますが、ここで出てきますシチュエーションとしては列車に乘つて、そしてだんだんと暮れていく、そして雪國に入つていく。窓ガラスに指で線を引くと女の片目がはつきりと映る。實はこの女が前に出てくる女とは違ひます。この指だけが覺えてゐる女といふのはこれは駒子ですが、この女は次に出てきます、ここでは名前が出てきませんが、葉子といふ女でありまして、この葉子がちようど列車の向かひ側の座席に男と一緒にゐて、まあ病んでゐるやうな男ですね。そしてちやうどそれが反對側の窓ガラスに鏡のやうに映る。實際に大變美しい、なにか魅かれる女性である、ただそれをじつと見つめるわけにはいかないので、窓ガラスを指で引いたところに現はれたちやうど鏡になつてゐるところに、その女とそれが介抱してゐる病んでゐる男が映る。特に女の目が映つてゐるといふ大變象徴的なさういふ作品です。

娘は島村とちやうど斜めに向ひ合つてゐることになるので、ぢかにだつて見られるのだが、彼女等が汽車に乘り込んだ時、なにか涼しく刺すやうな娘の美しさに驚いて目を伏せる途端、娘の手を固くつかんだ男の青黄色い手が見えたものだから、島村は二度とそつちを向いては惡いやうな氣がしてゐたのだつた。

鏡の中の男の顔色はただもう娘の胸のあたりを見てゐるゆゑに安らかだといふ風に落ちついてゐた。弱い體力が弱いながらに甘い調和を漂はせてゐた。襟巻を枕に敷き、それを鼻の下にひつかけて口をぴつたり覆ひ、それかまた上になつた頬を包んで、一種の頬かむりのやうな工合だが、ゆるんで來たり、鼻にかぶさつて來たりする。男が目を動かすか動かさぬうちに、娘はやさしい手つきで直してやつてゐた。見てゐる島村がいら立つて來るほど幾度もその同じことを、二人は無心に繰り返してゐた。また、男の足をつつんだ外套の裾が時〻開いて垂れ下る。それも娘は直ぐ氣がついて直してやつてゐた。これらがまことに自然であつた。このやうにして距離といふものを忘れながら、二人は果しなく遠くへ行くものの姿のやうに思はれたほどだつた。それゆゑ島村は悲しみを見てゐるといふつらさはなくて、夢のからくりを眺めてゐるやうな思ひだつた。不思議な鏡のなかのことだつたからでもあらう。

鏡の底には夕景色が流れてゐて、つまり寫るものと寫す鏡とが、映畫の二重寫しのやうに動くのだつた。登場人物と背景とはなんのかかはりもないのだつた。しかも人物は透明のはかなさで、風景は夕闇のおぼろな流れで、その二つが融け合ひながらこの世ならぬ象徴の世界を描いてゐた。殊に娘の顔のただなかに野山のともし火がともつた時には、島村はなんともいへぬ美しさに胸が顫へたほどだつた

かういふ記述ですね。ガラスに映畫のごとく二重寫しになつてゐる。ちやうど川端がデビューしたころには映像文化が出てきて、川端も映畫の臺本を書いたりしてゐます。

西洋のさういつた寫眞あるいは映像、映畫の技術が入つてきました。日本でも映畫監督がいろいろな作品を作り出した。大正のアヴァンギャルドとかさういふものの影響があつたのでせうが、これも大概さういつた時代的なものであると同時に川端の文體の特徴が出てゐる。「距離といふものを忘れながら、二人は果てしなく遠くへ行くものの姿のやうに思はれたほどだつた」といつた獨特な言ひ回しである。

また先ほど讀みづらかつた「青黄色い手が」――これは非常に讀みにくい言葉です。かういふ言葉を川端は時折入れます。つまり音讀してちよつとひつかかるやうな、とくに色の言葉を用ゐます。ここは例へば「青黒い手」とか言つた方が分りやすいのですが、ここでは青、そしてちよつと黄色がかつた手といふ表現です。

そして次の行で「鏡に映つた中の男の顔色はただもう娘の胸のあたりを見てゐるゆゑに安らかだといふ風に落ちついてゐた」と書いてゐます。そして、「弱い體力が弱いながらに甘い調和を漂はせてゐた」といふ風に、つまり現實の青く黄色く濁つた手と、鏡の中の映し出されてゐる男の顔、これをかういつた短いフレーズの中で描き分けてゐます。このやうな表現が「雪國」の至る所に出てきます。

そして「雪國」の特徴は省筆、徹底して筆を省略するところにあります。通常の小説ですとリアリズム、描寫で描くべきところを川端は行開でさういふ表現をします。

具體的に言ひますと、ちよつとまた再讀していただければと思ふのですが、島村といふこの男と駒子といふ藝者が初夏に山から下りてくる。そして、田舎の藝者だからちよつと戯れてみようかといふやうな邪な思ひであるのですが、實際駒子といふ女性は非常に清潔なのです。さういつた印象を受ける。ただその駒子と島村、主人公は男女の仲になります。そこのところのシーンは省かれてゐますが、これは檢閲を意識したのではなく、初めから川端は書いてゐません。先週亡くなつた渡邊淳一さんとちよつとその邊が違ふ。そこのところは大事だから逆に描かない、ですからスッと讀んでいくとどこで二人がなつたかといふのは分からない、つまり行開の中に男女の逢瀬が書かれてゐる。

一回目、二回目はその行間で逢瀬のシーンが描かれてゐる。そして三回目は、實は島村は東京に住んでゐて、家族、妻もゐる。ですから駒子は次第にその島村との關係に苛立ちを覺える。島村も駒子を深く愛するやうになります。愛すれば愛するほどこの出口のない愛情の袋小路になります。島村も迷宮の中に入つていく。さうするとそこからだんだんと出られなくなる。つまり現實の世界から夢の世界、幻の世界に入つて行つて、その幻の世界の中で島村は生きなければならなくなる。ですからそのまま行けばこの二人はある意味破局が訪れます。しかし「雪國」はこの破局を描いてゐません。つまり葉子といふ、先ほど出てきた汽車の鏡に映つた女性、この葉子といふもう一人の女が出てきまして、この女性は非常に透明な、現實の生身の女といふよりは一種幻の中の幻のやうな女でして、それがこの島村と駒子の間にすうっと入つてくる。そのことによつてこの二人の破局、カタストロフィーは免れるやうな、さういふ構成になつてゐます。

實は戦前の昭和十二年に出された單行本の「雪國」ではそこまで書かれてをりませんでした。結末はやや曖昧なところに置かれてゐた。この後島村と駒子はどうなるのかなといふところで終つてをりますが、戦後版にははつきりと、實は葉子といふ女性が火事で二階から身を落とす。ちよつと衝撃的なシーンですが、空中から葉子が落ちるシーンが描かれてゐる。死んだのかどうかは描かれてゐませんが、つまり葉子といふこの世ならぬ女性がこの島村と駒子といふ二人の愛の破局を救つたやうな形で描かれてゐる。

かういふ最後のラストシーンを川端は戦後書いた、といふのは、私は一つはやはり戦争、敗戦、――もちろん川端は戦争に行つてゐませんが、――敗戦といふのを非常に深いところで受け止めました。鎌倉には空襲はありませんでしたが、川端は灯火管制の夜回りもしたりしてゐた。そんなことをしながら戦争末期の状況を回想した「天授の子」といふ作品があります。ちよつと讀んでみますと、

> 月夜は格別であつた。人工の明かりをまつたく失つて、私は昔の人が月光に感じたものを思つた。鎌倉では古い松の並木が最も月影を作る。灯火がない夜は何か聲を待つやうだ。空襲の爲の見廻りの私は夜寒の道に立ちどまつて、自分のかなしみと日本のかなしみとのとけあふのを感じた。古い日本が私を流れて通つた。私は生きなければならないと涙が出た。自分が死ねばほろびる美があるやうに思つた。

かういふ風に書いてをります。「古い日本が私を流れて通つた」、「自分が死ねばほろびる美があるやうに思つた」とも書いてをります。

川端の中でこの世相が終り、そして敗戦といふのは非常に大きなショックでした。

盟友横光利一が亡くなつた昭和二十一年に、「君もまたこの敗戰によつてその喉骨を碎かれた」といふ追悼文があります。

そして同時に川端は戰爭中に、源氏物語を讀んでをります。湖月抄版の源氏物語を讀んでをります。これは東京への往復の列車の中で、あるいは灯火管制の暗い家の中でこれを讀んでゐます。延寶元年に出ましたこの版本は江戸期に流布したものと言はれてをりますが、これを川端は大きな文字の和本で持つてゐたと言はれてをります。

後に、戰後すぐ「哀愁」と言ふ隨筆にかういふ風に書いてをります。

> かつて私が長物語のほぼ半ば二十二三帖まで讀みすすんだころに、日本は降伏した。下劣な妙な讀み方をしたが、しかし私に深い印象を與へた。電車の中で時々源氏に恍惚と陶醉してゐる自分に氣がついて私は驚いたこともある。もう戰災者や疎開者が荷物を持ち込むやうになつてをり、空襲におびえながら焦げ臭い燒け跡を不規則に動いてゐる。そんな時、電車と自分との不調和だけでも驚くに値した。千年前の文學と自分との調和により多く驚いてゐた。

昭和二十二年十月に書いてをります。

川端はこの和文のかな書き文字に戰爭の現實を忘れさせてくれるやうな陶醉を與へられる。

しかし同時に非常に深い、千年昔の哀しみの聲、さういつたものも感じたと書いてゐます。川端は御存じのやうに源氏の現代語譯はしてをりません。ただ、現代語譯をしようかといふ思ひはあつたやうです。

ノーベル賞受賞は昭和四十三年十月ですね。川端は逗子の葉山で自殺するのは昭和四十七年四月ですが、ノーベル賞の後に編輯者の伊吹和子氏に源氏物語の現代語譯の構想があると言つたといふ。さう編輯者は書き殘してをりますが、私はおそらく川端は源氏物語の現代語譯はやつてゐない手をつけてゐないと思つてをります。といふよりは、川端にとつてこの戰爭中の源氏物語の體驗といふのは非常に深く彼の魂の中に入つて行つた。從つて、谷崎のやうに現代語譯をやるよりは戰後の彼の作品、小說の中に源氏の流れ、インパクトを取り入れたいといふ思ひがあつたのではないかと考へてゐます。

谷崎の源氏物語に關して川端は、あれは東京の人が譯したものだと感想を述べてゐたさうです。

川端は谷崎とは別の意味で源氏を深く享受してゐる。これが戰後の「山の音」、それから「千羽鶴」、「眠れる美女」、「みづうみ」、そして「たんぽぽ」これは未完で終つてゐます。かういつた五つの作品に特に流れてゐると私は思つてゐます。この五つの作品には、「魔界」といふ言葉を使つてゐます。既に川端の研究者、評論家の多くがこの言葉を言つてをりますが、川端が戰後特にこの魔界といふ言葉を象徵的に使ふやうになります。

そしてノーベル文學賞の受賞講演で、有名な「美しい日本の私」と題した講演がありますが、この中で魔界といふ言葉を出してゐます。

ちよつと一文を讀ませてゐただきます

> 私も一休の書を二幅所藏してゐます。その一幅は「佛界入り易く、魔界入り難し」と一行書きです。私はこの言葉に惹かれますから、自分でもよくこの言葉を揮毫します。意味はいろいろに讀まれ、またむづかしく考へれば限りがないでせうが、「佛界入り易し」に續けて「魔界入り難し」と言ひ加へた、その禪の一休が私の胸に來ます。窮極は眞・善・美を目ざす藝術家にも「魔界入り難し」の願ひ、恐れの、祈りに通ふ思ひが、表にあらはれ、あるひは裏にひそむのは、運命の必然でありませう。「魔界」なくして「佛界」はありません。そして「魔界」に入る方がむづかしいのです。心弱くてできることではありません。

一休がこの魔界といふ言葉をどういふ意味で使つたか、これは色々說がありますし、あまり直接一休さんはこの魔界といふ言葉に意味付けはしてをりませんが、川端はこの一休の書を受け止めた。この魔界と佛界、「佛界入り易く、魔界入り難し」。通常これは逆ではないかといふ印象がありますが、しかし佛界、救ひの世界、外側の世界といふのでせうか、この中には魔界といふ中身の世界が、あるいはこの世の道德や規範を超えたものが何か、藝術、美しいものの究極のところにあると。美しいものにあこがれる心の中に魔性的な力が宿つてゐる。

川端は戰後直接この言葉を使ふときもありますが、直接使はないで作品の中で表現してゐます。たとへば「山の音」、これは昭和二十五年に出されましたが、今回改めて何度も讀み返しましたが誠に陰慘な、嚴しい作品です。

また「千羽鶴」といふ作品、これは鎌倉を舞臺にして、圓覺寺の茶會、そしてそこに使はれてゐる志野茶碗が出て

きます。一見すると日本の古典的な美、茶道の世界を材料にして川端が日本人らしい傳統的な美しい世界を描いたと思はれがちですが、さうではない。魔界としか言ひやうがない人間の深い罪惡といふか愛憎、さういふ世界を描いてをります。

川端のオブセッション、川端の世界の中で出てくるものとしては男女の愛で、この他者を愛するといふものは實は愛すればこそ、愛するが故に相手を破壞する、つまり愛といふものが必ず他者を破壞していく、さういふ風に人間の愛といふものを捉へてゐます。從つて純粋な愛といふものは、交はらない。純粋でありつつ、もし交はることができれば、それは川端が求める究極の愛です。

ずつと交はらないでゐるといふことが純粋な愛なので、從つて「伊豆の踊子」ではさういふことになつてゐます。

しかしその後の作品では、愛、愛欲、そして他者を愛することが相手を破壞していく、といふテーマがあります。極めて特異な戀愛小説といつてもいいと思ひます。

これはおそらく色〻なところから川端の中に出てくるテーマであります。

今日最後になりますが、「眠れる美女」といふなかなか面白い、不思議な作品がありまして、もう時間がありませんので細かくは申し上げられませんが、この「眠れる美女」は川端の代表作の一つであります。江口といふ老人がある祕密クラブに入る。そしてそこには睡眠藥か何か分りませんが眠らされた若い女が一絲まとはぬ姿で横になつてゐる。そしてそこで一晩老人たちが添ひ寢をする。極めて變つた、奇妙な設定の作品です。

この江口老人は、實はこの祕密クラブの老人たちより自分はまだ男として力がある、そのやうな設定になつてゐます。そして不思議な世界に入つていくといふ作品です。

この作品でも川端は明らかに文體を變へてゐまして、パッと見た瞬間に分るのが、非常にかなが多いことです。川端は實は語彙はそんなに多くありません。三島由紀夫などに比べると、語彙の數が少ない。それから意外に「うつくしい」とか「かなしい」といふ言葉を繰り返します。ひらがなで繰り返されてゐる。

江口は鍵を持つたままの手で煙草に火をつけると、一吸ひ二吸ひ、ほんのさきだけで灰皿に消してゐたが、つづけて二本目はゆつくりと吹かした。輕い胸騷ぎの自分をあざけるよりも、いやなむなしさが強まつた。ふだん江口は洋酒を少し使つて寢つくのだが、眠りは淺く、惡い夢を見がちだつた。若くて癌で死んだ女の歌讀みの歌に、眠れぬ夜、その人に「夜が用意してくれるもの、蟇、黒犬、水死人のたぐひ」といふのがあつたのを、江口はおぼえると忘れられないほどだつた。今もその歌を思ひ出して、隣りの部屋に眠つてゐる、いや、眠らせられてゐるのは、「水死人のたぐひ」のやうな娘ではないのかと思ふと、立つて行くのにためらひもあるのだつた。娘がなにで眠らせられてゐるか聞いてはゐないが、とにかく不自然な前後不覺の昏睡におちいつてゐるらしいから、たとへば麻藥にをかされたやうな鉛色に濁つた肌で、目のふちはくろずみ、あばら骨が出てかさかさに痩せ枯れてゐるかもしれない。ぶよぶよ冷めたくむくんだ娘かもしれない。いやな紫色によごれた齒ぐきを出して、輕いいびきをかいてゐるかもしれない。江口老人も六十七年の生涯のうちには、女とのみにくい夜はもちろんあつた。しかもさういふみにくいことの方がかへつて忘れられないものである。それはみめかたちのみにくさといふのではなく、女の生のふしあはせなゆがみから來たものであつた。江口はこの年になつて、女とのみにくい出合ひをまた一つ加へたくはない。この家に來ていざとなつて、さう思ふのだつた。しかし眠らされ通しで目覺めない娘のそばに一夜横たはらうとする老人ほどみにくいものがあらうか。江口はその老いのみにくさの極みをもとめて、この家に來たのではなかつたか。

かういふ文です。

川端の中にある醜と美の連捷法といふものが出てゐる。實は「伊豆の踊子」でも先ほど申し上げたやうに、非常に透明で美しい流れるやうな文章ですが、峠の茶屋に入りますとそこに痛風の非常に醜い老人が描かれてゐる。ですから、踊り子の白い美しい肉體と、醜怪な、生き物とは思へないやうな老人の肉體といふものが、實は伊豆の踊子でも對比されてゐます。

さらに「みづうみ」といふ作品は實はあまり高い評價を受けてをりませんが、私は川端の作品の中では突出したものであると思ひます。幻想と現實が交錯する、夢と現が回轉ドアのやうにくるくると回つていく。さういふ作品です。

そして文章は流れるやうでもあるし、非常に尖つた部分もあるし、やはらかな部分もある。さまざまな要素があります。

ノーベル文學賞を受賞する昭和四十三年の十月で中斷しますが、最後の長篇は「たんぽぽ」といふ作品。これは二

人の登場人物の會話でほとんど成り立つてゐます。つまり對話で、ほとんどの客観描寫は對話の中にあつて、生田町といふ一つの街、そこにある精神病院、中ではきちがひ病院となつてゐますが、そこに娘を預ける。その戀人である男と母親が娘をその病院に預けに生田町に行くシーンから始まりますが、ずつと對話が續いてゐる。對話の二人の聲の中に、直接現れてはこない娘の姿と、生田町の風景が描かれてゐる。これもまた全くそれまでとは違つた作風です。殘念ながらこれは完成しませんでしたが、もし完成していればどんなものになつたのか大變興味深いです。

川端がノーベル賞を受賞したのは國際的にも日本文學の名を上げて大變素晴らしいことですし、川端康成は文學賞の授賞式に文化勲章を下げて、紋付き袴で登場しました。そして先ほどの「美しい日本の私」といふ素晴らしい、これはある意味で川端文學を自ら要約した講演でありますが、それを喋りました。サイデンステッカーがこれを英譯したのですが、とても英語では表現できないやうな、道元、明恵、西行、良寛、一休、その他の和歌が引用されてゐる。

よくこれをサイデンステッカーは短時間で英譯したなと思ひますが、それでもやはり日本語でないと傳はらない。

つまりノーベル文學賞の對象になつた作品は「古都」あるいは「雪國」でありますが「古都」は川端作品の中ではかなり通俗的に京都を舞臺にして書いてゐます。つまり、西洋人にも分かる。翻譯を通してもわかる作品です。

しかしその後の「みづうみ」「眠れる美女」は、なかなか西洋人には理解できない。川端は、「自分の作品はある種の東洋的な無、空を描いてゐる。これは西洋のニヒリズムとは全く違ふ」と言つてゐます。

つまり西洋人には理解できないと彼はノーベル賞の講演ではつきり言つてをります。

日本文學の中から汲み上げて、現代小説を新しい形で表現したものを川端の魔界の文學と私は名づけましたが、さういふものではないかと思ひます。

またぜひ皆様に川端の作品を御再讀いただく機會があれば大變うれしく思ひます。

ご清聴有難うございました。

（とみをか　かういちらう　文藝評論家、鎌倉文學館館長）

一音節の大和言葉の世界

大喜多俊一

二合三勺の時代もあつたが

二合三勺、金鵄（巻きタバコの名）、少國民、月月火水木金金などの言葉をいま懐しむのは、昭和十年代の苦難を凌いで生きてきた人々である。若い人ならよほどの物知りか、時代の研究者以外にはなじみのない言葉であらう。言葉は、いふまでもなく、その時代を背景にして使はれる一面を持つてゐる。アイデンティティとかメンテナンスとか、あるいはスマートフォンなどといふ、現代多用されてゐるカタカナ言葉もこの時代を反映しての用語である。

そこで、今、時代とともに移りゆく言葉に對峙して、古來からずつと使ひ續けられてゐる多くの大和言葉の姿はどうかといふことにいささかの關心を寄せてみる。そんなことを考へる中で、とりわけ一音節の語のおほむねすべてを取り上げてみると、そこには言葉の問題もさることながら、日本人の素朴な生活の様子が浮き彫りになつてくる。そんな語と今日の言葉をじつと見つめると、時の流れの中の歴然たる違ひを示す有爲轉變の様が感得される一方、事は、物は、あるいは人の行動の基本の形といふものは、不變不

易なものであることをあらためて實感するのである。

速く傳はる一音節の語

まづはなぜ一音節の語に關心を寄せるのか。多忙な暮しの現代では略語が多用される。ところが、そんなに忙しくない時でも、思つたことや求めることが速く、といふか、すぐに傳はつてほしいと望むのは昔も今も變らない。そのため、日常の營みや話題の中で、短い言葉で、しかも相互に理解しやすい語は何かと考へてみると、それは一音節の語のやりとりだと氣がつく。

かつて東北地方のある方言に「お食べなさい」―「はい、いただきます」といふのを「ケ」―「ク」といふのだとある書物で讀んだことがある。實際にその應答を聞いたことはないが、一音節の語もしつかり傳はるものだという實感は十分に理解できるといふものである。以下に示す一音節の語を見ると、それは日常の話題の中でよく使はれる語であり、それはまさに時代を反映するものであつて、言葉の問題を超えて興味がわく。殊に衣食住やそれにまつはる一音節の言葉を見ると、わが國の往古の生活が見えるやうで、しかも、その多くが今の時代にもそのまま用ゐられてゐる現象が續いてゐて、そこに言葉の變らぬ一面が見られると

言つてよい。傳達が敏捷にできることは確かに一音節の語によるのが至便で、大和言葉の顯著な特色の一つである。

衣食住とその周邊を見ると

では、まづ、毎日の生活に缺かせない食べることに關する言葉から見ていかう。「粉」、「菜」、「酢」、「根」、「鬆(す)」、「穂」（稲やすすきなどの穂）が一音節の語である。主食には米と穀物の粉を使ひ、野菜は菜つ葉と大根。鬆は時期を過ぎた大根・ごばうの芯にできる細かい穴のこと。これらの一音の語から、それらが大切な食材だつたのだらうと考へられる。「木」の「實」も多く食されてきた。調味に「酢」がよく用ゐられたものとも推測できよう。液を「生(き)」のまま飲むといふ表現もある。

次に住むことに關はる語。必需物としての水は「井(ゐ)」。建物は「木(き)」で造られる。「戸」や障子もあつた。「簾(す)」も使ふ。疊表の材料には「藺(ゐ)」が今も昔も使はれてゐる。部屋に「燈(ひ)」をともす。水を沸かして「湯」にする。「火」をおこす苦心もあつただらう。「巣」は鳥類・小動物だけでなく「山賊の巣」のやうに人間の場合にも使はれる。「餌(ゑ)」は動物に與へる食物に使ふ。

衣服に關はつては「麻(を)」と「裳(も)」がある。「緒(を)」は糸偏の語で、使ひ道の多い細い紐のことである。「褻(け)」は着なれた肌着や衣服のこと。よく「褻にも晴れにも變りなく」と使はれる。

身邊の道具の類ひに目を移すと、「箕(み)」、「簀(す)」、「柄」、「輪」、「輻(や)」、「羽」、「刃(は)」、「矢」、重い「荷」もある。舟・船舶の「帆」も一音節である。日常の生活の道具に加へて小さな戦ひの氣配が見られる語に注意する。輻は車輪の中心から外輪を結ぶ放射狀の棒である。

それを扱ふのは人間。「身」そのものに關しては、「手」、「背」、「毛」、「血」、「齒」、「目」。顔は「素」の顔が擧げられる。そして、自分の周圍には「子」がゐて、その子が乳兒のときには「乳(ち)」を與へて育てる。よく見かける農耕・狩獵にも關係の深い動物には「兎」と「猪(ゐ)」。兎は耳が長いが、「尾」の長い小動物も「斑(ふ)」の模様のある動物も見かける。「鵜(う)」を驅使した鵜飼ひは傳統のある漁法で、昔からよく行はれてゐたし、川といふ場所では水中の「藻(も)」を刈ることもしばしばあつたが、岸の草原ではよく「蚊」にさされる。それは昔も今も全く同じである。

生活文化の面では、梅の「香(か)」を聞く春、蟲の「音(ね)」を樂しむ秋、といふやうに、人々は春秋四季をりをりの風情をたたへてきた。これも、今昔變りない事象である。

自然を表す言葉と人の行動のカ變・サ變

人は外に出る。目に入るのは「野」と「田」。田は面積の單位としての「畝(せ)」。河川では「瀬」と「州(す)（洲）」が、湖沼や海では「津(つ)」と「江(え)」が一音の語である。山なら山の「端(は)」と使ふことがある。

人の行動の基本は「來(く)」と「爲(す)」である。この二語は語幹と活用語尾の區別がないままに頻用されてきて、今日の學校文法ではカ行變格活用・サ行變格活用としてよく知られてゐる。なほ、變格活用ではないが、語幹と活用語尾が分けられない語がもう一語ある。文語の「得(う)」で、この語はア行下二段活用である。

人の行動の今一つ日常的になされるのが會話による對應である。「名」を知ることから始めるのが普通。「私は京都は福知山の『出(で)』です」などとよく使ふ。用法は「水の出(で)がわるい」と同じである。對話の中で、空言を「眞(ま)」に受けるとか、相互がちぐはぐで「間(ま)」が持たないといふ場合もあらう。また別に、人は毎夜寝るのが一般の習慣である。古語は「寢(ぬ)」。生理的現象である「屁(へ)」は「値」（價値）のないものといふ解釋をしてみる。「屁とも思はない」などと言ふ表現もある。

人と人との關はりは昔も今も同じやうに氣にかかる。その人はだれですかと尋ねたくなる時がある。「誰」そがれである。（「誰そ彼(たそかれ)」の意味。薄暗がりでわかりにくい夕暮れ時をいふ。黄昏(たそかれ)）。その人がお父さんが舊臘(きうらふ)亡くなつて「喪(も)」に服してゐるので、年賀狀を出さないと言つてゐたと聞く。彼の悲しみが思ひやられる。なほ、夕暮れ時の「たそがれ」の對比語として、夜明けの頃の薄暗がりのことを「彼(か)はたれ」といふのもおもしろい。「かはたれどき」のことである。

大方の一音節の語は字音語系

右の記述の文章中で、「 」を施した漢字のよみが、今取り上げてゐる大和言葉の一音節の語である。全部擧げても百語（同音異語）ほどである。次の語にも注目してみよう。夜は人間の日夜の感覺とものを數へるときの言葉である。夜は「夜(よ)」ともいふし、「日(ひ)」を數へるときには「日(か)」といふ。「二日、三日」といふやうに。一つふたつの「つ」は「箇(か)」と同様に接尾語としての大和言葉である。

男女雌雄を表すのに「雄(を)（牡）」、「女(め)（雌）」がある。十二支の中では「子(ね)」、「卯(う)」、「巳(み)」、「亥(ゐ)」があり、ものをかぞへる場合の「千(ち)」は「千歳」、「千尋(ちひろ)」などのように使はれ

る。このやうに接頭語として使はれる一音には他に「小」と「御」がある。それぞれ「小走り」、「御供へ」のやうに使ふ。

色を表す一音節の語は「黄」と「丹」

右に示すやうに、大和言葉の一音節の語はおほかた舉げてみたが、意外に少ない。一音節の語は、字音語系統に甚だ多くあり、時として大和言葉ではないかと錯覺しさうなこともある。例へば、「冑．櫓・巴」（いろは）はどうか、また「和・我・世」（わがよ）のうち大和言葉はどれか。ここでは「世」は「君が代」の「代」とともに大和言葉であることを知る。「大和路」といふ場合の「路」は接尾語としての大和言葉で、同類の接尾語としては「そのあたり」をさす「邊」（海邊、野邊など）、「ものの重なり」を表す「重」（八重、十重二十重など）、「家」（わが家）、「舍」（學び舍）がある。既出の「木」は接頭語で「木の下闇」「木の葉」も同用法である。「八重」の「八」も接頭語なのでこの語は「重」を軸と考へればよい。他の使用例では「七轉び八起き」を舉げる。數の「四」も同類で「四人」がその例である。付言ながら、語の意識としては「木の葉」は一語として把握され、「木の葉」は三語の扱いとされる。

漢字辭典あるいは漢和辭典によれば、字音語系の一音節がズラッと竝んでをり、それはとても多く、漢字の見出しの形として示されてゐる。

が、字音語は古來の日本語には無いものながら、後には多くの一音節の語が漢語として、盛んに用ゐられるやうになる。これらの語は必ず漢字で表さないと意味がわかりにくい。例へば、「意に沿ふ」の「い」と「虎の威を借る狐」の「い」とは似て非なる意味であるから、これの違ひは書くときは必ず漢字で表すことが缺かせない。類例を舉げれば、「しを覺悟した戰ひ」「しを朗讀する」では、前者は「死」、あとの方は「詩」である。なほ「威」は歴史的かなづかひでは「ゐ」である。

かうした字音語系統の一音節の語も、思ひを素早く傳へるのに便利な言葉であるとはいふものの、語數が多いので、使ひながらも漢字を示して補ひの説明をしなければならない、といふ厄介な場合もある。そんなことを考へると、大和言葉の一音節の語は多くなく、使つて便利な言葉である。

だがこれもインパクトの效いた發音でないとわかりにくい場合もあつて、次のような補正表現のあることもまた觀察と使用の際の注意點である。例へば、「葉」は「葉つぱ」といひ、「田」は「田んぼ」といひ、また「箕」は「箕の子」、「野」は「野原」といふ語で表したりすることである。

以上、右至近に舉げたケースも視野に入れて、大和言葉の一音節の語について、一考してみたところである。

（おほきた　しゆんいち　元京都市教育委員會課長）

動詞の自他と複合

山崎　馨

日本語にも、他の言語と同様に動詞と呼ばれる語群があります。それは主として動作や作用を表現しますが、なかには「ある」「ゐる」のやうに存在を表現する語もあり、詳しく研究されてゆくうちに、さまざまに分類されるやうになりました。ここでは動詞を自動詞と他動詞に分ける考へ方に從つて話を進めることにします。まづはその用例です。

（自動詞）	（他動詞）
理解が深まる	理解を深める
頭が痛む	頭を痛める
紐がほどける	紐をほどく
苦勞が重なる	苦勞を重ねる
病氣がなほる	病氣をなほす

右の用例においては、たとへば「苦勞が重なる」と言へば「苦勞といふことが、重なるといふ動作をする」のであり、「苦勞を重ねる」と言へば「苦勞といふことを重ねる、といふ動作をする」ことになります。言ひかへれば、「重なる」は苦勞自身の動作ですが、「重ねる」は苦勞自身の動作ではなく、苦勞が「重ねる」といふ動作の對象になつてゐるのです。

この自動詞なり他動詞なりは、個々別々にはたらくだけではなく、それが二語連續し、複合してはたらくことにも現れてきます。すなはち複合動詞の登場です。動詞が複合しますと、動作の表現が詳細になり、複雑な動き、微妙な動きをも表現することができるやうになりました。

現代語から例をあげますと、

1　泉の水が澄みとほる
2　櫻の花が散りはてる
3　人の心を繋ぎとめる
4　全財産を使ひはたす

1澄みとほるはただ澄むだけではなく、泉の底まで見えるほどに綺麗に澄むことであり、2散りはてるはただ散るだけではなく、花の散り方が限界にまで及んでゐることを表現してゐます。また、3繋ぎとめるはただ繋ぐだけではなく、動かないやうにしつかりと繋ぐことであり、4使ひはたすはただ使ふだけではなく、財産の使ひ方を極限にまで及ぼすことを表現してゐます。ここで注意すべきことは、1で複合する澄む、とほるが、どちらも自動詞であり、2で複合する散る、はてるがどちらも自動詞であること、また、3で複合する繋ぐ、とめるがどちらも他動詞であり、4で複合する使ふ、はたすがどちらも他動詞であることです。このやうに、複合動詞においては、その複合する二つの動詞の、一方が自動詞ならば他方も自動詞になり、一方が他動詞ならば他方も他動詞になる。これが原則です。この原則にそむいて

　家運を立ち（自動詞）なほす（他動詞）
　家運を立て（他動詞）なほる（自動詞）

などと言ふ表現は日本語ではありますまい。ここは、家運が立ちなほる、あるいは、家運を立てなほす、と言はなければなりません。

そこで現代の流行語「立ちあげる」について考へてください。右に述べてきたところから、すでにおわかりのはずです。

　立ち（自動詞）あがる（自動詞）
　立て（他動詞）あげる（他動詞）

などは日本語ですが

　立ち（自動詞〉あげる（他動詞）

これは日本語ではありますまい。總理大臣をはじめとする國會議員、會社の社長、銀行の頭取、各種團體の役員、學校の教員などに、さらには新聞記者、放送擔當者などにも、傳染病のやうにひろがつた奇怪な流行語、この耳障り、目障りな流行語「立ちあげる」を、大切な、愛すべき日本語の世界から排除したいものです。讀者の皆さんはどのやうにお考へになりますか。

（やまざき　かをる　神戸大學名譽教授）

國語議聯の六年

谷田貝常夫

「日本語」特區

國語議聯とは「国語を考える国会議員懇談会」の通稱にて、設立は平成二十年五月なれば、以來六年を閲す。この間會長は平沼赳夫議員（元經産相）にて一貫すれど、副會長の一人川端達夫議員（元民主黨幹事長）、翌二十一年文部科學大臣になりて本議聯を外る。文科省の大臣、以後今に至るまで、民主黨の田中眞紀子議員を含む五人の大臣、入れ替はり立ち代り就任せり。この短き六年の、政界の變動甚しかりし中、本議聯の繼續せられたることに一入の感慨あり。本議聯成立して後に大きなる刺戟受けたるは、設立一年後の、東京都世田谷區なる船橋小學校の授業參觀なり。平成十六年、教育特區なる制度設けられ、全國の大方の小中學校、「英語」授業の特區なるを選びたるに、世田谷區「日本語」なる教科を推進せんとせり。命名は國語授業すでに存在すればのことなり。教育特區に國語を選びたるは、他には新潟縣の新發田市のみと聞く。時の世田谷區教育長若井田正文の英斷により、「日本語」授業の基本的なる考へ方を定む。「言葉」それも殊更に「日本語」を中心に据ゑ、言葉は知的活動の、豐かなる人間性の基盤にて、表現力にも肝要、さらに「日本語」は日本文化の基調なるものなりとす。因みに、「國語」なる既存の授業あれば、「日本語」と名附けるより他、手なし。

その後三年かけて世田谷區獨自の教科書を作成、平成十九年四月より小學校全學年にて「日本語」の、中學校にては「哲學」「表現」の授業を開始す。此の獨自なる「日本語」教科書の作成にあたりては、斯文會石川忠久會長の推薦もありて、幼時より漢字を教ふる「石井（勳）式漢字教育」を實踐しきたりし、日本漢字教育振興協會の土屋秀宇理事長、責任者としてその體驗を活かしたる活躍をなせり。兩者とも「國語問題協議會」の役員なり。

土屋氏の紹介により、平成二十一年四月、平沼會長、川端副會長の國會議員ならびに文部科學省の役人を含め三十數名がバスにて船橋小學校に赴き、小學二年の四十人程の學級の「日本語」授業參觀す。授業内容は驚かされしことに漢詩の「春曉」なり。擔任女性教師の周到に準備せる疊一帖ほどもあらむ白紙に書かれたる語句の說明などありて讀みに移り、活潑なる四十五分の授業にて九割以上の生徒、此の詩を丸ゝ暗記せるが參觀者にも確認せられ、讚嘆の聲しきりなり。「春眠曉を覺えず　處處啼鳥を聞く　夜來風雨の聲　花落つること知る多少」。朗々と暗誦する生徒達は自信に滿ち、文科省關係者の溢き顏と對蹠的に嬉々たるものなりき。

小學校教育には未だに廢止されぬ「學年別漢字配當表」なるもの存在し、小學一年には僅か八十字の配當あるのみなり。二年の始め頃のことなれば、生徒、漢字は「雨」と「花」を除きては知らぬ筈にあらずや。漢詩「春曉」に使はれたる漢字は五言絶句なれば二十字、うち二年の末までの配當漢字は、「春鳥聞夜來風聲知多少」の十二字、六年の終りまでに「落覺不處」の四字習ひて、遂に「眠曉啼」は小學校にては習はずに了はる。かかる漢字を易々と小學二年の生徒理解せり。

因みに、世田谷區教育委員會發行の「日本語教科書」、一・二年、三・四年、五・六年の三册なり。いづれの卷も短文、詩、俳句、短歌、漢詩、論語などよりなり、古文等は歷史的假名遣に、發音假名をつけたり。例へば一・二年の「瘦せ蛙」は「かへる」のルビ振り、さらにその外に（え）を加へり。三・四年には小倉百人一首全て載せられ、ルビは蛙と同樣の方式をとる。「衣ほすてふ」には「ちょう」なるルビ付されたり。

參觀終はりての質疑應答に當然のことながら文科省の役人、書くはいざ知らず、これほど容易に文字も單語の意味も覺えらるゝものを、教ふるに制限を設けるなどとは、生徒を愚と見立たる教育方針ならむやと非難せらるゝに、役人答へむ由もなし。校長の辯に、この「日本語」教育にて一番大變なる思ひしたるは、教へる教員への教育にして、眞に多くの時間を割きたりとあり。戰後教育受けたる教員なれば、宜なりと納得せられたり。

平沼會長、この參觀以後機會あるごとにこの特區教育の成果を披露し、子供の能力の高きを稱讚すると同時に、文科省の考へ方に反省を促すこと頻りなり。

法律の文章

平成二十年に本議聯發足せる當初からの目的とするところは一貫してをり、變はることなし。國語や言葉の問題をとりあぐれば、課題果てしなく、兎角に複雜なる議論生じて目標を見失ひ勝ちとなること必定、されば抽象的なるお題目にてはなく、具體的なる二點に絞りたるものなり。卽ち

一、穴あき五十音圖の是正（「ゐ」と「ゑ」の學習）

＊現在の小學校においては、「五十音圖」なる語避けられ、教室にては「ひらがなの表」などと稱せらるゝ紙の、壁に

張出さるゝこと多ければ、カタカナは示されず、ヤ行ワ行の五ヶ所に穴あく。括弧つきのい、え、は書き表はさるゝことあれども「ゐ」「ゑ」は示されぬ。教科書、辭典にもかかる表あることよく見掛けらるゝことなれば、穴あける箇所を埋めて學習せしむべしとは、この條の意圖なり。

二、國歌君が代（歌詞）表記の是正（別記第二の改正）

＊「君が代」の歌詞中、「いわお」とあるは意味不明、生徒は「岩音鳴りて」と解釋するが普通といふ。この語、奈良時代より「いはほ」と書かれ、「岩のひいでたるもの」の意とせらるれば、傳統、古典を大切にすと公言せる文部省が方針に違背すること明白なり。

この二にある、「別記第二」とは、平成十一年に制定されたる法律第百二十七號「国旗及び国歌に関する法律」中のものにて、「君が代」の歌詞規定されたるが、そこにおいては、傳統的表記を踏みにじりて、古語表記の「いはほ」が恣意的に「いわお」と改惡せられたり。

この國旗・國歌を規定せむとする法律に二つの問題點あり。そもそも、國歌國旗のあることは國民の常識ないし無意識界に存するが本來なれば、法的の強制は不用なるものなり。かかるを、戰後の教育界においては淺薄なる歴史觀しか持ち得ず、己れの國なるはずの日本國に對し、惡意を示すことをもて生活の資とせる教員の集團組織が、日本の國歌國旗を踏みにじるを生徒に強要し續けたるがために、生徒達に大なる弊害を與へたること一般國民の目に明々白々たり。已むを得ず法的にかかる惡弊斷たんとしたるは、已むを得ざることといふべし。

今一つの問題點は、法律文そのものにあり。この法律制定にあたり、衆議院内閣委員會におきてその點を指摘せるは西村眞悟議員なり。まづは法律文を擧げん。

第一条　国旗は、日章旗とする。

第二条　国歌は、君が代とする。

この法律文に對し西村議員は、「國旗は日章旗とする。國歌は君が代とする』はをかしい。平成十一年の時點で、日章旗が國旗とされ、君が代が國歌とされたのではない。遙か以前から、國旗は日の丸、國歌は君が代だつた。從つて『國旗は日章旗である。國歌は君が代である』とすべきである。それを官僚があたかも自分が國旗と國歌を制定したやうに答辯するのである」と眞に核心を衝きたる、しかも日本官僚の無意識の世界を剔抉（てつけつ）せる發言をなせることに深甚の敬意を表せしものなり。

法律に疎き筆者は、「我輩は猫である」なる類の命題文が法律文たりうるか判然とせぬところなれど、現行憲法第四

十一條に「國會は、國權の最高機關であつて、國の唯一の立法機關である。」とあれば、「「國歌は君が代である。」は、法律文として十全の資格を有すとなし得。ひと頃『するとなるの言語學』なる池上嘉彦の著作により、日本語と英語、延いては日本文化と西歐文化の差異の論かまびすかりし。單純に約せば、英語は「する言語」にて、他動詞を多用し、無生物主語をとるに對し、日本語は「なる言語」にて自動詞多用し、人間主語をとるといふものなり。されどこの日本語の「する」、自動詞に多く用ゐらるゝは確かなれども多義にて、英語の傾向の如く他動詞にて、人間主語をとることあり。辭書の説明に曰く、「に」「と」などの後につけて「或る狀態にならせる」の意となると。つまり使役の意に使はるゝことありといふ。この「國歌は、君が代とする」なる法律文、その典型ならむ。「人間主語」が、君が代を國歌とす、その際の主語は官僚ならむとする西村眞悟議員の推測まことに正鵠を射たり。「日章旗」なる語をわざわざ用ゐたるところにも「日の丸」といふ語に對する内々の抵抗感じられ、かくて君が代の、古語を枉げて「いわお」に至りたること、同じ心情ならずや。

この法律、當初の目的に背馳することなく運用せられてあるは可なりとすべきも、その表現に問題あり。現行憲法の如き惡文にはあらずと言へども、甚だ不適切なる日本語といふべし。陰險なる底意の伺はれ、母國に對する愛情有りとはつゆ思はれず。早々に改訂せらるべきものにて、ここに國語議聯の果すべき役割あり。解決策に二つあり、ひとつは官僚が己が謬りを認めて自主的に訂正す、今一つは議員立法にて訂正することなり。されど、官僚側に訂正の動きさらさら無く、一方國語議聯もこの六年の政情を眺むるに議員の變動も多く、議員立法の可能性もかなり低きものと思はざるを得ぬ。法律を變ふること、如何に難からんと痛感すること頻りなり。

今後の小學教科書

「現代かなづかい」は、大戰直後の昭和二十一年に内閣訓令・告示により公布せられたるものにて、行政上の規定による。依りてこれを正さんとするには行政に働きかけねばならず、ためには政治の力を必要とすること理の當然なるべし。長きあひだ、そは認識せられたれど、具體的なる發動はかなはぬことと半ば諦めをりたるに、ここに國語問題協議會より派生せる「正かなづかひの會」、滝沢幸助氏を會長に戴くに及びて、國語問題、政治の世界に一歩を踏出すに至れり。

滝沢幸助會長、昭和五十八年に福島にて民社黨黨員として出馬、衆議院議員に當選、以後國語の正常化を國會内にて働きかけ、人名漢字制限の撤廢、五十音圖の復活を訴ふ。因みに、滝沢なる姓、新漢字によるものと見らるゝも、實は江戸時代よりの由緒ある家系によるものなること、過日、テレビの福島探訪時に目撃せられたり。

かかる滝沢議員の強力なる國語正常化活動に同調し、昭和六十一年、自由民主黨、民社黨の衆參兩院議員九十八名が、硬骨漢の稲葉修議員を會長に「国語を考える国会議員懇談会」を設立せり。遺憾なることながらこの議聯、滝沢議員の退隠により、活動低迷、短期間に自然消滅したるもののごとし。

平成二十年に設立せられし今回の國語議聯、發足以來六年を閲せること、會長の一貫して平沼赳夫議員なること、同氏の軸のぶれざることと共に慶賀すべき、囑目すべきことなり。

例會には毎回、必ずや文部科學省、文化廳の課長級擔當者の、部下數名と共に出席するも異色のことならずや。餘談ながら、一日、漢字の扱ひにつき文化廳國語課を訪ひたることあり。一國の言語文化の軸たるべきこの國語課、狹き部屋に十名少しが課員なれば、これのみにて日本全國の國語教育に對處しをることに驚かるゝと共に、防衛費より多額なる豫算を扱ふ文部科學省本廳の、國語課を蔑(なみ)せるがごとき扱ひに憤り感じたるものなり。

國語議聯の例會におきては、既にして文科省に幾つかの質問を投げかく。

平成二十三年における、五十音圖の、ヤ行の（い、え）、ワ行の（ゐ、ゑ）の穴空きに對する回答は、學習指導要領、教科書圖書檢定基準にはその取扱ひの基準は設けてをらず、内容は、各教科用圖書の發行者（つまり民間企業）等にて適切に判斷せらるゝものなり、と餘所事(よそごと)然たるものなり。他の質問に對する回答のみを擧ぐれば、「檢定基準において、指導要領に示す内容を不足なく取上げることを求めてゐるところで、指導要領に示されてゐない内容をとりあげるやう求めることは困難である」「マスコミの關係では、新聞とか放送系その他色ゝと取り決めをされてをられると承知してゐるが、國がそれに對して何かといふのは難しい」等々と何事にも困難を繰返し、木で鼻を括りたるごとき役人答辯なりし。

斯くて、文科省、法制局に求めたる、五十音圖の是正、國歌君が代（歌詞）表記の是正なるただ二つの項目の最低目標は、六年經ちても達成せられざるままなり。

さはいへ、毎年のごとくに國語議聯の例會に出席し、平沼會長を初めとする熱意ある議員達の質問、信念表明に接せるあひだに、役人達の國語施策に對する意識に變化讀み取らる。政府側の答辯、當初の強張りたる見下し調は消えて、われら斯く努力せりといふべきものとなる。

本年五月の例會におきて、文科省の課長、多くの資料持參し、國語科の内容につき、小學一二年においては、昔話や神話・傳承などの本や文章の讀み聞かせをし、三四年にては、易しい文語調の短歌や俳句につきて情景を思ひ浮べたり、リズムを感じ取りながら音讀や暗誦をしたりすることとなりたりと説明す。資料には、兎や鰐の切抜き用の繪まで付したる因幡の白兎、やまたのをろち、海さち山さちの話などあり。

興味深きは、既に二年にて「いろは歌」の載れることとなり、ここに新假名のルビつきにてワ行の（ゐ、ゑ）現はる。ただ今も「ひらがなのひょう」と表面糊塗せる圖表名から拔け出せざるは、國語學上にても基本たるべき五十音圖を迂回せんとの意味ならんか。

五六年の教科書にては、親しみ易き古文、漢文、近代以降の文語調の文章につき内容の大體を知り音讀すとせられ、また古典につき解説したる文章を讀みて昔の人のものの見方や感じ方を知ることとあり。更に資料を見るに、假名及び漢字の由來、特質などにつき理解せしむる方向とて、ゐゑを含む變體假名の載るものもあり。ここに國語教育に於ける流れ、漸くに日本文化尊重へ向はんとするかと見受けられたり。

「日本文化の繼承と發展」を理念とする小學生用教科書副讀本が現はれたるは、平成十七年にて、國語問題協議會の理事石井公一郎氏と萩野貞樹氏の編輯にかかるものなり。ここにては第一學年より難波津などの古歌、ルビ附きなれど歴史的假名遣にて紹介さる。その二年後に世田谷區日本語特別區向けの教科書作られ、これはさらに道元の和歌や杜甫の絶句までが一二學年にて學ぶ對象とさる。更に平成二十一年には低學年と高學年の分册となつた「小學國語讀本」を元國語問題協議會主事の土屋道雄氏が刊行、これは總ルビにて韻文ははづし、大方は古事記による、いはゆるお話を載す。新潟縣新發田市も日本語特別區に指定され、獨自の教科書を作成せりと聞く。以上どの讀本も、とても文部省の檢定は通るまじきことを前提としてをり、今の文科省の方針が逆にその動きに追隨するがごとくに見ゆるも面白き現象ならずや。

今回文科省の提示せる資料の中に一番心搏たれたるは、

日本名鬼怒鳴門こと、ドナルド＝キーン氏の「かなえられた願い――日本人になること」なる文章にて、小學六年に配當せる教科書のありたることなり。教科書の編輯より檢定を經て生徒が使用するに至るまでは通常四年を要す。キーン氏、東日本大震災における日本人のみごとなる對應を見て最終決斷し、翌平成二十四年日本に歸化す。この文章、何時書かれたるかは存知せざれど、平成二十七年の生徒使用となると、兎角反日日本人の團體の反對にて遲るゝものが、この文章は通常より一年以上早まりたりと見ゆ。これを思ふに、戰後の昭和二十一年十一月の告示による「現代かなづかい」は、審議僅か半年にして公布せられたるものにして、いかに蒼惶の間に國の大事が決定せられたかを思ひ、こと改めて憤りに堪へざるものあり。

（やたがひ　つねを　元普連士學園學園教頭）

新文體の創出

日本文藝復興の提唱（序）

市川　浩

敗戰直後に強行した國語改革は七十年に垂（なんなん）とする時世が過ぎ、日本文化の變質解體への懸念の深まる中、「常用漢字」、「現代假名遣い」なる二つの內閣告示、更には內閣依命通知による「公用文作成の要領」は今や法律をさへも規制する憲法竝の效力を誇り、最早その廢止又は改正は夢の亦夢に等しい。

しかし、國語の再生なくして、日本の再生は不可能であり、當協議會は結成以來一貫して正統國語の復活再生を追求してきた。從來の活動に加へ、實效性を期待し得る新しい活動は考へられぬか、然樣な視點から提案するのが標題に掲げる「新文體の創出」である。

「新文體」の內容は後述するとして、何故今「新文體」なのかを先づ明かにせねばならぬ。現在國語の書き言葉は「口語體」である。これは明治から大正にかけて、新來の西洋思想を記述し得る書き言葉として完成したものであるが、その口語體は近年劣化が止らない。

その大きな症狀の一つは、今の口語體は「言文一致」なりとする意圖的な謬見の橫行である。「話すやうに書く」のを好しとする結果、書き言葉としての獨立性を完全に喪失してしまつた。特に話し言葉に於ける相手への氣遣ひを反映し過ぎ、動詞を終止形で言ひ切る簡素明快な表現が衰へてゐる。これは本來四段動詞以外は終止形と連體形とが別形であつたものを、口語體化に際してすべてを同形化したことが原因の一つでもある。今一つの症狀は漢字を制限し過ぎたため、海外の新概念に對する的確な飜譯がまゝならず、專門家以外は內容の想像すら不可能となり、知識の偏在を招いてゐる。この二例のみを以てして既に新文體の必要なこと、事情は明治初期と變らぬことが諒解せられよう。

新文體は從つて日本の文藝復興を目指して先づ書き言葉としての獨立の恢復と新しい概念に對する造語力竝びに表現力の增強を主張する。更に現在の「口語體」に對する行政的な施策、例へば常用漢字への對應を重視した術語の表記又は呼稱の變更、文語表現の排除、更には歐文との飜譯の便から歐文的語法への奬勵といつた事などへの異議申立てを含む。

以下具體的な課題に就いて列擧して見たい。實例は次頁に示した。

○動詞終止形による言切りの復活。(四段動詞以外の終止・連體別形の復活)

○助動詞適用の見直し。(「だ」「です」の形容詞、助動詞、一部動詞などの終止形への接續改善)

○候文の他、文語表現の内適當なものの再利用。(曰く、欲す、ばや、如し、なり、たりなど)

○片假名表記の外來語の國語表記への轉換竝びに直譯語の見直し。(要すれば漢字の使用を表外字に擴大)

○敬語、特に皇室敬語の洗煉(「御」の過剰重複の回避、「れる、られる」への過度の依存排除)

かうした文體改革は、日記、書翰など「個々人」による創出活動から始めて、文藝作品や各種論文は勿論、作文指導に至るまで擴大することで日本文藝復興への第一歩となることが期待できる。趣旨の贊同を得べく、國語議聯、印刷・出版社を含め、博く文筆家、學者、記者、評論家(ジャーナリスト!)に呼掛け、平成の新文化運動として旗揚げし、當協議會はその代表發起人となるべきである。新文體がかやうに文語體への一部復歸を含むことからも、正字・正かなの採用は言ふまでもない。このことは現在の口語體の創成期に於て、文語體との整合性を維持することで書き言葉としての獨立を確保せむとしたことに通じる。

從つて地名人名、固有名詞での、例へば「おほをかやま」、「平塚らいてう」、「日本國」などは現狀の「口語體」や交通機關の表示にも積極的に使用を推奬して行く。即ち年來の主張である正字・正かなの復活普及を單なる表記問題から新文體創出運動の一環に發展せしめることで、博く一般の關心を喚起したい。

特に表記問題に就いては冒頭の内閣告示等が前書きにより實情に配慮して適用範圍をかなり制限してゐるにも拘らず、依命通知への反映が進んでゐない實態を明らかにすることで、兎角これらの行政指導を絶對とする風潮に一石を投ずる必要がある。右に述べた、「おほをかやま」や「平塚らいてう」は「現代かなづかい」の前書き四項の「これによりがたいものは除く」に當るし、「日本國」は「常用漢字表」の前書き三項の「固有名詞を對象とするものではない」から當然である。從つて新文體への參加を表記問題を理由に躊躇する必要は全くない。

新文體に於ける文例(傍點は常用漢字表表外字)

現狀口語體	新文體
○動詞終止形の活用	
サ變動詞　首相が明言した	首相明言す(文語終止形の再利用)
カ變動詞　努力して來た	努力し來(く)(文語終止形の再利用)
一段動詞　考えられる	考ふ(文語終止形の再利用)
五段動詞　思われる	思ふ
○助動詞	
空が美しいです　空が美しかつたです(だ)	美しい空です　美しい空でした(だつた)
面白いでしょう(だろう)	面白いでせう(だらう)
食べられる	食べられる(可能)　召上がる(尊敬)
○文語表現	
御礼を申上げます	御禮申上げ候
「〜」と語つた	曰く、〜と
○歐風表現	
象の鼻は長い	象は鼻が長い

これ等五、六人合せて五六、七人

○かたかな語

グローバリゼーション

テレビ　パソコン

ワープロ　メール

○内容が想像不能又は誤解を招く譯語

排他的経済水域　Exclusive Economic Zone

孤立排他性　spirit of isolation and exclusiveness

帝国主義　imperialism

炉心溶融　melt down

ひも理論　string theory

計器校正　calibration

○敬語

皇太子様は盛な拍手を送られていました

行ってきます

訪問される

この五六人合せて五十六七人

世界一極化

電視機（中國に於ける漢譯）　業腦（わざなう）

電筆　電雁

專管經濟水域

獨立不羈の精神

霸占主義

爐芯熔潰

絃（波動）理論

計器較正　文書校正

皇太子殿下は盛に拍手なさいました

往つてまゐります

訪問せらる　訪問なさる　御訪問遊ばす

（いちかはひろし　㈲申申閣代表、本會常任理事）

「起落過盡」の論理
（「過す」か「過ごす」か）

高田　友

「起落過盡」の四文字を用ゐて、「おこす」「おとす」「すごす」「つくす」と書かんことを請へば、皆「起こす」「落とす」「過ぎる」「盡くす」と書き給ふ。

已哉。「起す」「落す」「過す」「盡す」と書くべかりしものを。

動詞の送り假名は、活用語尾を送るが原則なり。

他動詞「起す」は、「おこさナイ」「おこしマス」「おこす」「おこすトキ」「おこせバ」「おこせ」と活用す。

語幹は變化せざる部分の「おこ」にして、その下なる「さ・し・す・す・せ・せ」こそ活用語尾なれ。「さ・し・す・せ」の四段に亘りて活用するに據りて、「四段活用」とは申すなり。或る學生、問うて、「口語なれば、五段活用にて候はずや」と言ふ。澆季なるかな。

國運を傾くに至らしめたる國語審議會の定めも、かかる仔細には及ばず。然而、現代假名遣・當用漢字（常用漢字）の制定せられたる後、學校教育は表音派の牛耳る所となり、不必要に煩雑なる送り假名を送るべしとの奇怪なる慣行の成立したるなり。

自動詞「おきる」は、往時も今も、「起きる」と書く。上一段活用なれば、「きる」即ち活用語尾なり。斯く表記致せば、「起」の字は「お」に該ると表音派は嘯く。

他動詞「おこす」は、戰前は「起す」と書きてありき。この表記にては、「起」の字は「おこ」に該ると表音派は言ふ。

同じ「起」の字を、あるいは「お」あるいは「おこ」と讀むは整合性の破綻を免れず、との所信なり。

然則、「おこす」は「起こす」と書くべし。さすれば、「起」の字は「お」と讀まれて、「起きる」の場合と整合性を保つを得、と進歩主義に毒せられたる表音派は申す。

「落」の字も、漢字部分を常に同じ音に讀むべし。「落ちる」の「落」は「お」なるがゆゑに、「落とす」とすべし。「落す」と表記せば「落」を「おと」と讀むによりて、整合性を失ふ。

同じ理窟にて、「過す」「盡す」も、「過ぎる」「盡きる」との整合性を保たんがために「ご」と「く」を補ひて、「過ごす」「盡くす」と書けとの強辯、ああ、何をか言はんや。

豈圖らんや、表音派に整合性を重んずるの情ありとは。

「思は」「思ひ」「思ふ」「思ふ」「思へ」「思へ」と書けば、

ハ行四段活用の整合性顯著に窺はるるに、發音どほりに書くべしとの淺慮に據りて、「思わ」「思い」「思う」「思う」「思え」「思え」と書くを強ひ、剰へ、助動詞「う」を接續せしむれば「思おう（思はう）」となるがゆゑに、未然形には「思お」なる形もあり。仍りて「アワ行五段活用」と唱ふべしとの淺智慧を露呈す。

此の如く、整合性を齒牙にも懸けぬ愚者の群が、整合性を保たんとの口實を以て「起こす」と書けとは、醉狂と言はずして何と申すべき。

抑、整合性を云々するなれば、何條、「完ぺき」「駐とん地」「ら致」の如き醜怪なる交ぜ書きを許容するを得べけん。

「起落過盡」を讀むに當りてのみ、整合性を唱ふるとは、是、まさしく整合性を闕きたる主張と難ずべきにあらずや。

小學校には、『美』の字は『うつくしい』の『うつく』なり」と說く教師あり。

さにあらず。「美」は「うつくしい」なる文字にして、福田恆存氏に依れば、「さう讀めるやうに」「しい」を送るに過ぎず。

「盡」は「つくす」の「つ」にあらず、「つく」にもあらず。「盡」がすなはち「つくす」にして「つきる」なり。

「つきる」と讀ませんが爲に「きる」を送り、「つくす」と讀ませんが爲に「す」を送れるまで。

その際、如何樣に送るべしやの問題が、「送り假名論爭」に外ならず。

動詞・形容詞の場合は、「活用語尾」を送るを以て、傳統的なる手法と爲す。餘りて送らんには、蛇の胴體に足を描き加ふるの愚を犯したりといふべし。

「起こす」「盡くす」と書けと因緣を付くるの徒は、心底、整合性を重んずるにはあらず。

第一には、漢字を表音文字の如くに扱はんとの意あり。而して、同じ漢字は同じ音を持たざるべからずと勘ふるなり。

第二には、彼の輩は、漢字を嫌惡してあり。是に仍りて、文中の漢字の比率をして低からしめんが爲に、送り假名を殖さん（「殖やさん」に非ず）と陰謀を企つるなり。

我が年配の人々は、「あかるい」は「明かるい」と教へられたり。「明ける」との似非整合性を保たんが爲に、「明」の字を「あ」と讀めと強ふ。

活用語尾を送るとの原則に立てば、「明い」なり。

然れども、戰前より、「明るい」とするが常道なり。「明い」は、「あかい」と誤讀せらるるの虞あるに由りてなり。ゆめ、無定見なる妥協ならずやと疑ふなかれ。寧ろ以て臨機應變なる對應と爲すべし。

「あかるい」は「明るい」とするが適切ならん。

平成の御世にては、小學生は「明るい」と習ひてあり。流石の無知蒙昧の文部科學省も、「明かるい」は荒唐無稽なりとの認識に到れるなり。

「結いの黨」なる政黨、出で來れり。「結の黨」と表記すべかりしものを。現代假名遣に從へば、「結わ」「結い」「結う」「結う」「結え」「結え」なるによりて、「結い」と爲せりといふに相違なからん。

然れども、名詞の場合は格別なり。

此處に於ては、活用語尾を云々するにはあらず。「動詞の連用形、名詞に轉ずるときは送り假名を送らず」との我が國語の傳統に從ふなり。獨逸語にて、名詞の語頭を大文字にするに相通ずるものあり。

一にも二にも、眞の整合性を守らんが爲なり。

「結」のみにて「ゆい（ゆひ）」と讀むを得。

あるいは、「結の黨」にては、「むすびの黨」と讀まるるの虞ありと思ひたるならん。さなれば、ルビを振らば如何。

嗤ふべし。「結いの黨」と書きたるとて、初見の人は戸惑ふならん。「ケツイの黨」と讀みたるありと仄聞す。

借問す。「結」が「結い（結ひ）」なれば、「戀」も「戀ひ」と書かずばなるまじ。定家卿、如何にか嘆き給ふらん。

かつて、表音派は、「取締役」「受付係」を「取り締まり役」「受け付け係り」と書けと唱へしことあり。

入試問題また問題集に於て、「問い1」「問い2」の如き心なき表記の世を席捲したる時期もありき。

今、漸くにして、斯かる思想の因循姑息なる、國民の理解する所となりたり。

「結いの黨」は未だ殘存する表音派の屁理窟に媚びたるなれども、「駐屯地」「完璧」「問1」「取締役」等々は、既に國民的合意を得るに至れり。

「起落過盡」は、交ぜ書き等と異なり、眞の意味にて整合性の破綻したるに氣附くこと容易ならざる盲點と言ふを得ん。注意を要す。

漢字は表意文字（表語文字）なれば、音に拘泥するなく、自由に使ひたきものなり。かくてこそ、漢字の漢字たる所以を十分に發揮せしむるを得べからめ。

（たかだ いう　塾講師）

じる

高崎一郎

動詞「〜じる」で四つ假名に迷ふ場面は意外に多い。もちろん「〜する」と關聯するものは簡單だらう。「安んじる」「重んじる」や「通じる」「應じる」など、「肯（がへ）んじる」も今では古風な言ひまはしとなったが類推の範圍内である。

さて迷ひやすいものを三類に分けてみよう。

【一類】	【二類】	【三類】
・怖ぢる、おづ	・弄（いぢ）る	・抉（こじ）る
・閉ぢる、とづ	・捩（もぢ）る	・抉（くじ）る
・綴ぢる、とづ	・捩（よぢ）る	・しくじる
・捩ぢる、ねづ		・齧（かじ）る
・恥ぢる、はづ		・詰（なじ）る
・攀ぢる、よづ		・躙（にじ）る
		・穿（ほじ）る
		・かっぽじる
		・交（ま）じる
		・混（ま）じる
		・野次（やじ）る

一類は「怖づ」「閉づ」など文語に戻してみても、「安んず」「通ず」との違ひがわかりにくい。また全體に語義の似たものが多く、ザ行とダ行に分れる必然性を感じ取りにくい。たとへば「よぢる」と「こじる」との差を簡明に説明するのは難しいだらう。濁音のためか、全體にあまりよい意味の言葉はないやうだ。

もっとも「抉（こじ）る」は疑問假名遣の一つであり、古用例にはダ行が多いため「こぢる」説もある。語感としてもその方がすっきりするが、今度は「抉（くじ）る」と混同しさうだ。人によっては「こじれる」から「梃摺（てこず）る」を聯想するかもしれない。また「閉ぢる」も「閉ざす」と紛はしい。「閉ざす」は「戸鎖（さ）す」で、語源が全く異る。

唯一「交（ま）じる」「混（ま）じる」だけは他動詞の「まぜる」を思ひ出せばよい。また「野次（やじ）る」は語源がはっきりせず宛字の可能性が高いものの、字音假名遣と合致する。

「安んじる」は「やすみ＋す＋る」の變化だからザ行で當然なのだが、「退治（タイヂ）る」は「ダ行上一段」動詞とせざるを得ない。「牛耳（ギウジ）る」が「ジ」であるのも「耳」の字音由來である。字音假名遣だけは發音式でよいだらうといふ意見に從へば「タイジる」で、確かに簡單にはなる。しかしさうすると「御覽（ゴラウ）じる」が「ゴロウじる」、「格子（カウシ）戸」は「コウシ戸」であるべきだらう。一語を動かせば、思はぬところに影響が及ぶ。

假名遣は歴史研究ではなく、歴史的假名遣といへど近代的表記法の一つであるから、大きな矛盾のない範圍内で文法的整合性をかなり優先させてきた。しかし戰後はさうした現代的な實務性を考慮する必要がなくなつたから、たとへば辭書の歴史的假名遣注記は古用例を絶對視するやうになつて久しい。過去の考證は國語學の分野に任せ、我々は「使ひ勝手」を擔當してゆくべきであらう。

（たかさき いちらう　漢字音韻研究者、齒科醫師）

正略百字表

石井公一郎

壓(正)→圧(略)	圍→囲	醫→医	壹→壱	榮→栄	驛→駅	圓→円	應→応
櫻→桜	假→仮	價→価	畫→画	會→会	學→学	嶽→岳	樂→楽
罐→缶	關→関	歸→帰	氣→気	舊→旧	據→拠	區→区	經→経
縣→県	檢→検	權→権	顯→顕	嚴→厳	廣→広	號→号	國→国
碎→砕	雜→雑	參→参	實→実	寫→写	壽→寿	收→収	條→条
從→従	澁→渋	肅→粛	處→処	敍→叙	將→将	稱→称	證→証
乘→乗	眞→真	盡→尽	圖→図	數→数	聲→声	齊→斉	攝→摂
淺→浅	爭→争	總→総	藏→蔵	對→対	體→体	臺→台	爲→為
擔→担	單→単	團→団	斷→断	遲→遅	晝→昼	聽→聴	鐵→鉄
點→点	傳→伝	燈→灯	當→当	獨→独	屆→届	拜→拝	賣→売
麥→麦	發→発	濱→浜	佛→仏	淵→渕	邊→辺	竝→並	變→変
寶→宝	萬→万	與→与	豫→予	餘→余	譽→誉	來→来	亂→乱
龍→竜	兩→両	禮→礼	爐→炉				

［註］1 「燈」と「灯」はもともとは別字である。
2 表にはないが、「芸」と「藝」は別字である。
3 草冠の正字は四画、示偏は「ネ」でなく「示」が正字。
4 「辶・しんねう」の正字は一點でなく二點。「近」でなく「近」。

日中英 言葉の雜學（八）

高田 友

健太：萬葉集を讀んでゐます。柿本人麻呂が高市皇子を悼んだ長歌に感動しました。

高田：ああ、萬葉集で一番長い長歌だね。「高市皇子尊の城上の殯宮の時柿本朝臣人麻呂の作れる歌」といふんだ。

健太：萬葉だから、後世の文語と違ふのは當然ですが、「まつろはず立ち向ひしも、露霜の消なば消ぬべく」（壬申の亂／高市皇子の父・大海人皇子［天武天皇］に逆らふ敵が露霜の消えるやうに、どんどん滅んで行く樣子の描寫）といふ所がありますよね。「消ぬべく」つて、何ですか。「きえぬべく」なら分かるんですが、「けぬべく」だつて。

高田：古代には、「きゆ」の連用形が「け」だつたんだ。

健太：「けズ」「けタリ」「きゆ」だつたんですか。それぢやあ、どの活用の種類にも屬さないぢやありませんか。下二段なら、「けズ」「けタリ」「く」になるはずだから。

高田：古代日本語に、母音の連續を避ける特徴があつたことは前に話したよね。

健太：「我が家（wagaife）」のaiがiだけになつて、「わぎへ」になり、「我が妹」が「わぎも」になつたんですね。「我が大君」が「我ご大君」になるのも同じでせう。もつとも、こつちは、wagaofokimiのgaのaが脱落するんだから、「わごほきみ」になりさうなのに、「わごおほきみ」なんですね。

高田：「わごおほきみ」と表記しても、實際には「わごほきみ」と發音されてゐたのかも知れない。微妙な所はもうよく分からなくなつてゐるんだ。

いづれにせよ、「消え（kie）」が「消（ke）」になるのも理の當然ぢやないか。

健太：なるほど、納得しました。――――でも、をかしいな。人麻呂だから、西暦七〇〇年頃の話ですよね。「消ゆ」はヤ行活用だから、「消え」の「え」はヤ行の「え」。ア行の「え」とヤ行の「え」の區別がなくなつたのは平安初期だといふ話を先生に伺ひました。人麻呂の頃にはkieぢやなくて、kiyeだつたのだから、母音は連續してゐません。ieはeになるにしても、iyeがeになることはありえないんぢやありませんか。

高田：僕の薫陶が効果を發揮して來たね。そこまで推理できるとはホトホト感心する。しかし、人麻呂の時代には、かなりeとyeの混同が生じるやうになつてゐたといふ説が有力だ。だから、kieとkiyeの區別も曖昧になつてゐたんだらう。言葉といふものは、少しづつ變つて行くのだから、

人麻呂の時代にア行の「え」とヤ行の「え」の混同があつても、そんなに不思議ではあるまいよ。

健太：なるほどね。

高田：もう一つ、その矛盾を解消する說がある。もつと古代には、「きゆ（消）」の終止形は、「きゆ」ではなくて、「く」だつたといふんだ。カ行下二段活用だつた。

健太：「けズ」「けタリ」「く」「くる」「くれ」「けヨ」だつたんですか。後に、「け」が「消え」になつた（これについては、今回は說明省略）結果、類推で、終止形が「く」から「消ゆ」に變つてしまつたのかな。

高田：見事な推理だ。シャーロック・ホームズみたいだね。「け」が先にあつたのか、「きえ」が先だつたのか、學者によつて、意見が違ふんだ。いづれにせよ、「消なば」は「けなば」で何の不思議もない。

ところで、カ行下一段活用の動詞が一つだけある。

健太：「蹴る」ですよね。「けズ」「けタリ」「ける」「ける」「けれ」「けヨ」。

高田：この「蹴る」は古代には、ワ行下二段活用だつた。

健太：えッ、ワ行下二段？　だつて、未然形の「け」に「わゐうゑを」のどれも入つてゐないぢやありませんか。

高田：「くゑズ」が「けズ」になつたんだよ。

健太：「ゑ」はかなり後世まで、we の發音だつたとは聞いてゐますが、古代にもすでに、ア行の「え」との混同があつて、kuwe が kue になり、ke になつたといふわけですね。それにしても、「蹴る」が下二段といふことは、「くゑズ」「くゑタリ」「ける」------。あれれ、ワ行音が消えてしまふ。

高田：終止形が「蹴る」ではなかつたんだよ。

健太：へえ、「くゑズ」「くゑタリ」と來て、ワ行下二段なら、その後は、「くう」「くうる」「くゑヨ」ですね。終止形が「くう」だつたんですか。

高田：萬葉文法つて、面白いだらう。

人麻呂の「近江の海夕浪千鳥汝(な)が鳴けば心もしのにいにしへおもほゆ」にも、萬葉獨特の表現があるね。

健太：「おもほゆ」ですね。後世の文語なら、「おもはる」ですものね。「ゆ」といふ助動詞があつたんですね。それにしても、「思ふ」の未然形は「思は」ですね。「思ほ」なんて活用形はないんだから、「おもほゆ」つて、奇怪ですね。

高田：「思はゆ」が「思ほゆ」になつたんだ。

健太：現代語で、「思はう」「書かう」が「思おう」「書こう」になるのと同じかな。

高田：日本語の自然な變化として、關係があるとは言へるかも知れない。

健太：「思ほゆ」は、「オモオユ」と發音しさうなのに、みんな「オモホユ」と讀んでゐますね。當時は「オモホユ (omofoyu)」と發音してゐたんでせうけど、現代人が古語文語を讀む原則に從へば、オモオユぢやないとをかしいですね。「とほる（通）」も、「トオル」つて讀むんですから。

高田：萬葉文法は、後世の文語文法と相當に違ふので、萬葉語獨特の單語は、假名遣ひ通りに、「オ」でなく「ホ」と讀むといふ後世のルールが出來たんだね。「オモオユ」と讀んでもいけないことはないと思ふんだが。

健太：人麻呂の挽歌つて綺麗ですよね。戀人が死んだときに作つた、「紅葉葉の散りぬるなへに玉梓の使ひを見れば會ひし日思ほゆ」。ここにも、「思ほゆ」が出てゐますけど。

「なへに」つて、何ですか。

高田：平安時代になると「なべに」に變はるのだが、「～するにつれて」の意味なんだよ。

「玉梓(たまづさ)」は手紙のこと。「玉梓の使ひ」は郵便配達人のことだ。

健太：萬葉時代に郵便配達人がゐたとは思へませんが。

高田：そんなことはないよ。個人的に手紙を届けに行くお使ひのことだよ。生きてゐたときには、彼女はよく手紙をくれた。今、（別の人の手紙を持つた）郵便配達人が來るのを見るたびに、彼女のことを思ひ出す」といふわけだ。

健太：最初、漢字を見たときに、「紅葉葉」つて、どう讀むんだらうと思ひました。あんまり當り前なので、「もみぢば」とは思ひ付かなかつた。

紅葉といへば、「かへで」といふ言葉もあつたんですか。

高田：「楓」の葉つて、小さな手みたいな形ぢやないか。「かへるで」だつたんだよ。

健太：------うゝん。分かつた。「蛙手」が語源なのか。蛙の手に似てゐるから。

高田：東歌に、「子持山若蛙手(こもちやまわかかへるで)のもみづまで寢もと我は思ふ(も)汝はあどか思ふ」といふのがあるね。「楓」を「蛙手」と言つてゐる。

健太：しかも、「もみづ」といふ動詞まで使つてゐます。「紅葉する」ことを「もみづ」と言つたんですね。

それにしても、色つぽい歌だなあ。「子持山の若い楓が紅葉するまで、ずつとおまへと一緒に寢てゐたい。おまへはどう思ふかね」といふ意味でせう。セクハラものだ。

高田：「もみぢ」は「揉み出づ」から來てゐるんだ。染色液に布を漬けて、手で揉んで色を出す。だから、「紅葉する」は「もみづ」なんだ。

健太：でも、さうだとしたら、「もみづまで」でなく、「も

みづるまで」でないとをかしいですよ。「いづ」は下二段なんだから。

高田：その説明には二説がある。複合語になつた結果、活用が變つたと考へる人が多い。しかし、そもそも、語源が「揉み出づ」といふのが間違ひだといふ學者もゐる。

　こんな歌はどうかね。「百船（ももふね）の泊（は）つる對馬の淺茅山（あさぢやま）時雨の雨にもみたひにけり」。これも萬葉集で、朝鮮に使ひに行く使節が、對馬に立ち寄つたときの歌だ。

健太：「もみたひ」が紅葉と關係がありさうですね。

高田：「もみづ」に、持續を表す接尾辭の「あふ」が付いたんだ。「もみだふ」になるところが、清音化して、「もみたふ」になつた。

健太：そんな接尾辭があつたんですか。

高田：動詞の終止形から最後の母音を去つて、-afuをつければ、持續を表すやうになるといふ。古代の造語法だ。たとへば、「食ふ」はもともとは、「食ひ付く」の意味だつた。kufuだから、最後の母音を去るとkuf。それに-afuを付けると……。

健太：さうか！ kufafu。「くはふ」だ。それが、口語の「くはへる（咥）」になつたといふわけか。「食ひ付く」といふ狀態を持續すると、「咥へる」になりますものね。

高田：「叩く」にその作業をするとどうなるかね。

健太：これは驚いた。「戰ふ」になるんだ。戰ひといふのは、相手を叩く狀態を維持することなんですね。

高田：「付く」から「仕ふ（仕へる）」が出來た。人にくつついてゐる狀態が持續すると、家來になつて仕へることになるわけだからね。

　「押す」が持續すると、「抑ふ（抑へる）」。「取る」から「捉ふ（捉へる）」。「引く」から「控ふ（控へる）」。

　「控ふ」は手綱を引いて、馬を止めてゐる狀態を維持することを言つたりする。平家物語で、清盛にいぢめられて嵯峨野に姿を消した小督（こごう）を、高倉天皇の近習（きんじゅ）の源仲國が探しに行く。「控へてこれを聞きければ、少しも紛ふべうもなく、小督殿の爪音なり」と言つてゐるね。馬を引き止めて、琴の音を聞くんだよ。

　ところで、「もみたひにけり」だが、使節が、淺茅灣（あさふわん）（淺茅山（あさぢやま）と淺茅灣の讀みに注意。『あさふ』の發音は『アソウ』）に入つて行つたときには、もう、紅葉になつてゐて、その狀態が維持されてゐたから、afuを付けた。これを「もみぢにけり」と言つたら、灣に入つて行つたときに、みるみる紅葉に變つて行つたといふをかしなことになつてしまふ。

（たかだ いう　塾講師）

故宇野精一先生輓讚

石川忠久

宇野先生は數へ九十九歳の白壽を迎へられ、その七日後に長逝された。御葬儀には委員長を務め、弔辭に添へて讚を獻じた。

○平成二十年一月十一日作

四朝耆宿　四朝の耆宿（きしゅく）
一世儒宗　一世の儒宗（じゅそう）
學正天祿　學は天祿に正しく
名高辟雍　名は辟雍（へきよう）に高し
得其大德　其の大德を得
瞻彼清容　彼の清容を瞻（み）る
金玉山斗　金玉山斗
誰不仰風　誰か風を仰がざらん

[冬] [東]

四朝　明治、大正、昭和、平成の御代。
耆宿　學德高く人望のある長老
天祿　漢の天祿閣。東京大學にたとへた。
辟雍　周代に天子が設けた大學
金玉　金聲玉振　知德の備はること。『孟子』に出る語
山斗　泰山と北斗星。その道の權威。人に仰ぎ見られる人のたとへ、泰斗

後書

五月の講演では、『川端康成 魔界の文學』を上梓されたばかりの鎌倉文學館館長富岡幸一郎氏が、川端康成の多くの文章を引用して、その文體にからむ話をされたが、土田龍太郎先生は、豐富な讀書體驗の中からの國語の文章論を展開された。嘗て本協議會の理事であつた萩野貞樹氏に『名文と惡文』といふ名著があつたが、土田先生の御話は更に具體的であり、また今まで誰も敢て口にしなかつた獨自の見解を示されたところが人を惹きつけた。破格の文章にも和文藝の妙所があるとか、魅力ある惡文、惡文に見える名文なる發言は、秀逸なるアフォリズムといへませう。全體の格調さへ優れてゐれば宜しとされるのです。惡筆の者が據り所を得た氣がしました。

本誌二〇一號にある「怪しげなる十の漢字」につき、「學校では当用漢字で育っており、不勉強もあり、曖昧というか自信がない、これらの芸やら欠やらの別の意味の漢字を勝手に使っているものを、小冊子にして発行できないか」といつた御意見を頂きました。これは前々からの懸案になつてゐた大きな課題で、「漢字基本字形表」なる準備は出來てゐるのですが、實現してゐません。一方石井公一郎氏が十二年前の著書『エリート教育のすすめ』の中でこの問題につき、小中學生の特別コース、あるいは教養人のために、最小限の正漢字百字の表を作り、覺え、使つてもらひたいとされてゐます。その表をここに掲載しました。構想を改めて小冊子にする計畫を樹ててゐます。

「國語を考える国会議員懇談会」、通稱國語議連のことは折にふれ本會のホウムペイジに報告をしてきましたが、六年を經過したのを期に、「文語の苑」といふ團體のホウムペイジに活動狀況を纏めたものを載せてもらひました。そのため文語文になつてゐますが、今後の國語問題の展望に多少は役立つだらうかと思量しました。

本會の前會長宇野精一先生が亡くなられて六年になりますが、本會の評議員でもある斯文會石川忠久會長が作られてゐた追悼の漢詩がありましたので、ここに載せさせていただき、改めて宇野精一先生を追慕する次第です。

事務局長　谷田貝常夫

國語國字編輯委員　市川　浩
高田　友
中井　茂雄
谷田貝常夫

インターネット　URL

國語問題協議會　http://kokugomondaikyo.sakura.ne.jp/
國語問題點檢　http://d.hatena.ne.jp/kokugokyo/

關聯電網
文語の苑　http://www008.upp.so-net.ne.jp/bungsono/
文字鏡研究會　http://www.mojikyo.org/
橫濱五十番館　http://literature.jp/
(有)中申閣（「契冲」）　http://www5a.biglobe.ne.jp/~keichu/
平成疑問假名遣（高﨑一郎）　http://homepage3.nifty.com/gimon/
日本漢字教育振興協會　http://www.kanji-kyoiku.com/
高池法律事務所　http://www.takaike.com/
地獄の箴言　http://kimura39.txt-nifty.com/
言葉の救はれ―福田恆存論（前田嘉則）　http://logos.blogzine.jp/1/
現代國語への處方箋　http://www.geocities.jp/kokugo_shohousen/